

同人誌 (2016年版上半期)

風 狂

風 狂 の 会

| | | |
|-------------|----------|-------------|
| 詩 | | |
| 野の花 | 中平 耀 | (2016年6月登録) |
| 男の触覚 | なべくら ますみ | (2016年6月登録) |
| キーちゃん | 原 詩夏至 | (2016年6月登録) |
| 老の話 | 長尾 雅樹 | (2016年6月登録) |
| 高 浜 | 出雲 筑三 | (2016年6月登録) |
| 友 達 | 高 裕香 | (2016年6月登録) |
| ウィンドウズ10 | 高村 昌憲 | (2016年6月登録) |
| 庭 | 原 詩夏至 | (2016年5月登録) |
| ナマコ(海鼠) | 出雲 筑三 | (2016年5月登録) |
| 不正データ | 高村 昌憲 | (2016年5月登録) |
| おぼろな時 | なべくら ますみ | (2016年5月登録) |
| 石の話 | 長尾 雅樹 | (2016年5月登録) |
| 春の孤独 | 高村 昌憲 | (2016年4月登録) |
| 志 乃 | 長尾 雅樹 | (2016年4月登録) |
| 市場の人 | なべくら ますみ | (2016年4月登録) |
| 見える | 原 詩夏至 | (2016年4月登録) |
| 波がきた | 出雲 筑三 | (2016年4月登録) |
| あこがれ | なべくら ますみ | (2016年3月登録) |
| パンデミック | 原 詩夏至 | (2016年3月登録) |
| マイナス金利 | 高村 昌憲 | (2016年3月登録) |
| 月見櫓 | 出雲 筑三 | (2016年3月登録) |
| 称 名 | 原 詩夏至 | (2016年2月登録) |
| 老いた年金生活者の嘆き | なべくら ますみ | (2016年2月登録) |
| 土 壁 | 長尾 雅樹 | (2016年2月登録) |
| 日本語教師 | 高村 昌憲 | (2016年2月登録) |
| 無人家屋 | 長尾 雅樹 | (2016年1月登録) |
| 上州路 | 出雲 筑三 | (2016年1月登録) |
| 田園都市線 | 高村 昌憲 | (2016年1月登録) |
| グロリア | 原 詩夏至 | (2016年1月登録) |
| あるボランティアの日 | なべくら ますみ | (2016年1月登録) |

風狂ギャラリー

| | | |
|------------|-------|---------------|
| 三浦逸雄の世界(七) | 三浦 逸雄 | (2016年1~6月登録) |
|------------|-------|---------------|

評論

| | | |
|--------|-------|-------------|
| 世の中(一) | 北岡 善寿 | (2016年5月登録) |
|--------|-------|-------------|

| | | |
|--------------|-------|-------------|
| 世の中（二） | 北岡 善寿 | （2016年6月登録） |
| 日夏耿之介のエッセイから | 北岡 善寿 | （2016年2月登録） |
| 昭和の哀歌 | 北岡 善寿 | （2016年4月登録） |
| 永井荷風を考える | 神宮 清志 | （2016年6月登録） |
| 大岡昇平「俘虜記」再読 | 神宮 清志 | （2016年4月登録） |
| あまくない広津和郎 | 神宮 清志 | （2016年5月登録） |

エッセイ・随筆

| | | |
|---------------|-------|-------------|
| ある画伯の一面 | 神宮 清志 | （2016年1月登録） |
| クレモナ・ヴァイオリンの謎 | 神宮 清志 | （2016年2月登録） |
| 視線のもつエネルギー | 神宮 清志 | （2016年3月登録） |
| ある夏 | 北岡 善寿 | （2016年1月登録） |
| 美しい土地、美しい人（五） | 宿谷 志郎 | （2016年4月登録） |

覚書

| | | |
|--------------|-------|-------------|
| 風狂の会 川柳忘年会報告 | 原 詩夏至 | （2016年1月登録） |
|--------------|-------|-------------|

翻訳

アラン『わが思索のあと』（二十三）高村 昌憲 訳

執筆者のプロフィール

読者からのコメント

数年前に私たちが移り住んだ住まいは
都心からだいぶ離れた丘陵地帯の山の上にある。
四十年前に開発されたといふ古い團地だ。
今でも夏は緑の林にかこまれ、
頭上には都會にはない廣大な空がある。

林の中には
公園がわりの小さな空き地もある。
今は子供たちの遊ぶ姿はない。
散歩の途中深閑としたそこで一休みするのが
いつもの私の習はしだ。

山道には
名も知れぬ野の花が咲く、
まるで人間たちとは無縁に。
鳥の聲がかびすしい。

山の斜面の向うには遠く麓の町。
ちいさな家々が野面に張り付いてゐる。
昔は田んぼや畑だつただらうに。

それらを眺めるわが身を
時に山上の仙人になぞらへるのも一興だが、
俗臭ふんぷんたるこの仙人は
所詮は道端に咲く無心の花にも及ばない。

野の花はそれぞれに安んじてそこにある。
さう観念して今日も山みちを歩く。

ぎゅっと引き締めた足首
作業靴の先が
組んだパイプに
絡みつくように置かれた

男の足が止まり
提灯の腹のように膨らませたズボンの裾が
一瞬突っ張る
ちよつとの緊張

そこには何があったのか
引っ掛かるでもなく
男の動きにつれ揺れていた裾が
報せた要注意信号

静かに避けられた危険
男は次のパイプへとゆっくり
移動する

縦 横に組まれた足場
通り過ぎる人たちの 頭の上を男が歩く
朝日の中 きらきらと生き活きと
見上げる人もいて 少し得意気に

大丈夫！

もう、逃げやしないよ！

そう言って

親父が

庭へと連れ出した

手乗りインコの

黄色いキーちゃんは、

あっという間に

空へと

飛び去った。

まっしぐらに

全く迷わずに。

言ったじゃないか！

駄目って！

それなのに！

俺は

もちろん怒った。

お父さん！

あんたっていう人は

いつだって！

なのに

親父は

キーちゃんが飛び去った

青空を

まだ

ぽかんと眺めている。

あつという間に

信頼を

裏切られた

驚き？

怒り？

悲しみ？

いや、それとも

いま

安楽な「囚われの身」から

解放されたのは

インコではなく

長らく眠っていた

親父自身の

空への

飛ぶことへの

「自由」への憧れだったのか？

夢を見ましたか

さあ

何の夢を見ましたか

さあね

昨日何処へ行きましたか

ああ

何か面白いことがありましたか

さあね

いつまで生きられるでしょうね

ああ

生きるということも大変ですね

さあね

生きるということは死を待つことで

死を待つことが生きることで

夢とうつつの境目で

こうして生きているんですね

ああ

幸せでしょうか それとも

さあね

あなたは何が知りたいんです

いいや

やっぱり考えない方がいいんですか

そうさね

それはわからんからねえ

だから考えないでもないし

考えるでもないし

さてさて

何の夢を見ているのかねえ

褐色の争いに疲れ砂浜にでた
浜は何ごとも承知しているようだ
風は忘れなされと密やかに吹く

波は滑らかに時にきらりと銀になる
漂着した老木は白骨化したまま動かない
しかし誰も気にしている風はない

澄んだ青い空
出来たてのうろこ雲がすがすがしい
潮騒は不思議と聞こえてこない

風は音もなく過ぎている
波はそれでも規則正しく訪れた
足跡の凹んだ砂は少しずつ平らになってきた

しかし夜になると速度をあげ砂が飛ぶ
そしてじわじわ何かを覆い隠そうとする
それは強固な意志をもつ

「もう、友達だね！」

緑さわやかな季節 五月

新しい風が 私の心を浚った

「友達？」

小学生のようにはずみ

学生時代からの友の顔が浮かぶ

「友達になれるだろうか？」

もう、身をかざることはない。

お互いが笑顔でいられるように語ろう。

パソコンを交通網に譬えるなら
OSは車の基盤になる道路であり
列車の基盤になる線路であるから
大変困るのは高速道や広軌ばかり

一般道や狭軌の線路がなくなると
簡単に行かれた処も行けなくなる
そんな不自由もあるのにやたらと
ウィンドウズ10が急に迫って来る

無料の期限を強調して迫って来る
急ぎ最新のOSにしても機種が古い
プリンターが使えなくなって困る
USBが機能不全では手に負えない

変換後一か月以内なら戻せるらしい
又々急ぎウィンドウズ7へ逆戻りだ
良かった良かった全てが戻ったらしい
年代物のクラシックカーに乗る気分だ

豪華な寝台列車に乗っている優雅さだ
一般道や在来線にも十分に価値がある
企業の利益優先で迫って来るのは脅迫だ！
変わらない道具や風景にも〈文化〉はある

離れには
祖母ちゃんが
お布団に。

二階では
伯母さんが
ミシンを。

それでは
母さんは
どこだろう？

そうして
私は
どこだろう？

そうだ
母さんは
すぐ横に。

そうして
私は
ベランダに。

庭には
太陽が
燦々と。

世界は
この上なく
透明で。

芝の上を
ちょうちよが
舞っていた。

世界は
この上なく
明るくて。

それなのに
私は
泣いていた。

真昼
途方もなく
悲しくて。

原始動物として営々と数百万年
体軀の大半が外皮と単純な腸管
とにかくも慎ましく生きてきた

手もなく足もなく筋肉は最小の10%
眼も与えられない絶望に身をさらす
しかし呼吸器は怠ることなく働いていた

おいしい餌など廻ってこない
砂に漂う食いカスは僅かなる希望
選択余地のない砂を噛む

窮する者への唯一の救いは
危機一髪にだす猛毒ホルスイン
脳みそがないとは信じられない不知の能力

取り残された生存者なのか
それとも大いなる生存を賦与されたのか
今もひたすら忍耐の日々を過ごす

悲しいかな進歩者は常に優位をめざす
榮枯盛衰を論じない海鼠は生きている
悠久の時空を生きていく

一リットルのガソリンでどの位
走行できるのか表示していると
広告を鵜呑みにして購入した〈軽〉
それが机上のデータであったと

新聞やテレビで知らされてから
一ランク上の軽自動車でなくて
一ランク上の軽率販売であるから
呆れていると会社同士が提携して

ウィンウィンの提携で好機であると
超高給取りの外国人社長と財閥内の
辣腕で通る会長の固い握手を見ると
購入者のことはもうどうでも良いの？

超高給取りも辣腕も第一は会社らしい
利用者への裏切りは問題にならないの？
会社の提携ありきのデータ不正らしい
利用者への説明優先の提携ではないの？

燃費が車種決定の重要事項だっただけに
梯子を外されたような寂寥感が忌々しい
そのデータがある種の捏造だっただけに
ドライブの楽しみも半減して来たらしい

私の下に まだ妹も弟もいなかった頃
何年前だったかなんて 思い出せないほど前の事
総てのことが おぼろに霞んでしまった随分昔

幼い私はお寺の広間でお齋^{とき}をとっていた
誰かの法事が終わったばかりだったのだろう
一人おぼつかない手で箸を操ることに熱中していた
周囲には忙しく動き回る大人たちがいたようだが
音も声もしない中 彼等には顔すらあったのかどうか

突然よく解らない音がして 暗い影が揺れた
隣の 円い大きなお膳からのものだった

おとうさん おとうさん どうしたの
ええ～～っ おとうさん しっかりして

影が消え 現れたのは
母と 叔母の姿だった

その日祖父は亡くなったそうだ
そこに同席していた
医者だった叔父の手にも負えない短い時間だった
ということを誰かから聞いた

そんな小さい日のことを覚えている筈がない
きっと周囲にいた大人たちから聞いたことを 自分の経験として取り入れたのに違いない
そう言う人がいる

しかし私は その情景を覚えている この時父や兄 姉たちきょうだいが いたのかどうか
は分からない
ただ 私の後ろの祭壇には 何体もの仏様が立ち 広縁の向こうには緑色の葉が茂って 眩
しく揺れていたのを見ていたのだから

小石は卵ぐらいの大ききで
砂利道の端に落ちている
男は拾って遠投して見ようと
小石を手で攪もうとしたが
石はいつの間にか漬物石ほどになって
彼の片手ではどうすることもできない
仕方ないので両手で持とうとすると
さらに庭石ほどの大ききに成長した
男はびっくりしてこの大石を除けようと
両手で押して足を踏んばって見たが
石はびくともせずそこに存る
石の上には石割花が咲いている
やがて石のそばに小川が流れて来る
梅の花が咲き桃の花が咲き李の花が咲く
一天かき曇り
激しい雨が降って来て
男はぬれねずみになってしまう
男はやがて眼の前に奥深い森の泉を見た
清い水が湧き出ている

*

大石はやがて岩になってしまった
苔が生えて風化した肌がこぼれている
岩は洞穴を作り
そこから男の帰る道が開けている
彼はその洞穴の中へ入った
中は真暗で何も見えない
探照灯を持っていない彼は
かすかに明るんでいる出口の光を目ざして
一目散に歩き出した
洞穴の天井から天女の歌声が聞こえる

男は地の小さな穴から下を覗くと
地下は海底の荒波が足下を洗っている
男は地下に誤って落下した
体が海の底に沈もうとした時に
にわかに岩山が消え去って
小さな小石が男の足下にあった

春が来て幼馴染みのような顔を出す野辺に
眠っていた虫たちも微光を食べようとして
いそいそと出掛ける準備を始めているのに
見詰めると寡黙になって正座する春の土手

小さな命に急に触れたくて佇んで目を凝らし
そっと触れれば自分のものにしたくなる思い
食欲に似た本能の儘に引き抜いた小さな土筆
やっと足元に顔を出していたのは惑星の神経

お前が必死に表しているのは惑星の感情か
繊細に感じるものは考えているに違いない
お前が伝えようとしているのは惑星の孤独か
孤独でいればやがて枯れて仕舞うに違いない

今は枯れる季節ではないのに孤独でいれば
思い上がった掃除機があらゆる命を吸い込み
密かに造って行くのは新しい汚染地帯の砂場
細菌もウィルスも蔓延して死滅する惑星の茂み

孤独の茂みから芽を出し生長していた土筆が一本
それでも一本から一本へ伝わって行くものがある
男と女のように N極とS極のような別々の観念
異質の孤独はやがて恋の予感を放って閃光になる

娼婦の町の地図を胸に畳んで
女の立身は器量のままに梨の園を築く
雲雀の声や鶯の声や蟋蟀の声
早朝の草露のしたたり
出生の劣等感は開き直った生き様で
廓くるわは女の修羅の城
後めたさは恥部へのこだわり
春を売るのは皆んな浮草の泡沫しごと
射的屋の娘はひっそりと隠花植物の仕来りで
諦念きつぷと氣風で生きますと
愛しいものは掴みどころのない変幻の女心
当り前の一生を送るために
当り前にしつらえた婚約者が一人いたのに
「破談にしてくれ」とあの人は急ぐ
答える返事が「はい」と辛うじて笑う
父の死ぬ前に一度あの人を合わせたいと
父は「いい男だよ」そう言って死んだ
死ぬ程に惚れた男だから結婚するのよ
東北のあの子の故郷は雪のなか
生まれたまんまの姿で雪国の人となって
掌に余る乳房は寒さを知らずに抱かれる
鈴の音は雪の深さを告げている
雪は地から湧くように積ってゆく
ほろほろと泣く涙が凍って逆く
闇の深さを雪明りが開く
あの子の生い立ちも暗い
でも生きて行く二人の道は暗くない筈だと
決めてかかって生きるのが幸せなのだ
過去世の罪が現世の生き方を決めるのならば
何を好んで罪など犯せないものを
罪障は屹度わたしの生きざままで
消して見せましょう

女は男に抱かれて一人前とは
誰から聞いた言葉でしょう
わたしの胸の中にあの人を沈めてしまいたい
恋は真実に痛いくらいに
心を燃やしてしまうみたい

(三浦哲郎「忍ぶ川」より)

空腹を癒しに
初めての店に入った
活気を引きずる魚市場の食堂
大きく腕を広げ新聞に見入る男の頭には
セリの権利を見せる番号付きの帽子が

女性店員の親しげな挨拶
今日も来てくれてありがとう
オネエサンはいつもこの席に座るのよね
と 席に手を置く

確かに私は半年ほど前この市場に来てお昼を食べた
でも この店ではなかった
奇妙な感覚
あいまいな返事をし 運ばれてきた海鮮丼を見つめた
オネエサン 本当にこれが好きですね
いつもこれですもんね
またも感じる不思議

今日もこの前も
私はこの近く画廊に来たのだった
今回は 誰にも看取られず独り逝った友人の遺作展を觀に

前から計画されていた展覧会
この近くのマンションに住んでいた彼女自身の手で

会場に飾られていた沢山の花
挫折した悔しさと未練を隠しながらも
絵筆を持ち 微笑んだ大きな写真
仕事の合間に
市場の食堂へ行くのを楽しみにしていた

私は彼女の思いを背負ってしまったらしい
店員の　また来てください　の言葉に送られ
店を出た
立ち寄った洗面所の鏡に映っていたのは
私の顔だけだった

「あの...実はこれ、初めて言うんだが...」
そう前置きして
あの夜 S軍派のリーダー・Yさんは
おもむろに
つらそうに 呟いた
「あの...実は俺、霊が見えるんです！」

(なるほど...そいつはまずいな、相当...)
俺は思った
そうして 嘆息した
偉大なる「唯物弁証法」の信奉者にして
宗教なる「人民の阿片」の断固たる敵
「連帯」を求めて「孤立」を恐れぬ
真の(恐らく)革命的セクトの
その指導者に「霊が見える」だなど
(しかし...なぜ今、わざわざその話を...?)
人もまばらな さびれた集会所
蛍光灯が しんみり青白い

(そうか!)
突然 俺は気づいた
そして 思わず後ろを振り返った
どんよりと汚れた 無人の壁
しかし まさに今 この瞬間にも
Yさんの目には見えているのだ
そこに 自分を 俺たちを見据えて
無言の 無数の霊が轟めいているのが
まるで 授業参観日の教室の
子供を 先生を見つめる
父母たちのように...

(なるほど...そいつはつらいな、相当...)
俺は思った
そうして 追懐した
人皆知る S軍派の来し方

荒れた時代の
荒んだ戦場の
苔も生えない 不毛の前線で
ある一群は他党と団結合体し
結末は 無惨な同志殺し
他の一群は海外に雄飛脱出し
結末は 無惨な連続テロ
そして 残りの一群
もしくは「残党」が
今 こうして Yさんの指導の下
アイロンもかけない 汚い赤旗を
時折 思い出したように ドヤ街に掲げて
一杯機嫌のおっさんらと一緒に
「このルンプロ！」と
他の元気なセクトの精悍屈強な若者たちから
罵倒と 嘲笑と 嫌悪を浴びながら
まだ もそもそと「革命」を呻いている
その どんづまりの集会の背後に
それでもなお 背後霊のように立つ
見えるはずのない 見えてはならない
しかし やっぱり見える
「霊」の群れ...

それは...なあYさん 答えてくれ
むごいようだが
あんたも あっばれ
革命家なら 革命指導者なら
しっかり答えてくれ
それは...そいつは
集会所の後ろの壁面から
あんたを 俺たちを
無言で じーっと
見つめているのは
どんな霊なんだ？
あんたが あんたらが
本当だったら救う筈だった
でも その前に 殺されてしまった

弱い 貧しい人々の霊？

いや それとも

あんたが あんたらが

手を血に染めて

殺してしまった

同志の 被害者の霊なのか？

波がきた

次から次へと

誰かが懸命に造っている

波がまた来た

さっきやっと越えたばかりなのに

もっとやっかいな波がきた

しかし波がなかったら

きっと私は沈んでいた

ゆらり揺られて育ってきたのです

男は電車を見送り その後ろ姿に
指差し確認をする
乗客が乗り込み一瞬人がいなくなったホームを
端から端へ
きびきびと格好良く
何気なく監視カメラも視野に入れて

今度は電車を迎える
厳しい表情の運転手には両足を揃え
敬礼をし
次には 押し込んで 押し込んで
自分の身体も乗り込んでしまいそうになるほど
人を押し込む

子供の頃にあこがれた
電車の運転手にはなれなかった
駅改札員にもなれなかった
親が敷いてくれた軌道からは外れてしまった
せめて
混雑時の乗客整理員
通称 尻押しアルバイト に
精を出す

降りようとする人のいきおいに押し戻され
ホームからはみ出しそうになる が
すぐ立ち直り
朝日を受けて入ってくる
運転席にまた敬礼をする

男の目が輝く
まだトンネルから抜け出してはいないが

君は 最近 よく怒っている
例えば ヘイトスピーチに 心底 怒っている——ただ
余りに ヘイトスピーチをするやつを 怒る余り
思わず ヘイトスピーチをするやつへの 怒りを
いっそ ヘイトスピーチをするやつへの
怒りの ヘイトスピーチで 発散させたい——みたいな
そんな ヘイトスピーチの二次感染みたいな
どこか 「飛んで火に入る夏の虫」みたいな
悪魔が 「こいつら やっぱ馬鹿だわ！」と
指さし 大笑いしそうな怒り方で——というのが
何より 忌々しく 苛立たしい
それで ますます よく怒っている
だって そうだろ こんなザマでは
果ては ホントの 怒りのパンデミック！
いわば ホントの 憎悪のポトラッチ！
つまり これでは 君は やつそっくり
しかも それなら やつも 君そっくり
しかし それなら よく似た やつと君は
うっとり 互いを 見つめ合いながら
やっぱり 同じだ 俺たちは同じだと
がちり 握手を すればいいのか？
それとも 互いに ゲロを吐きかけて
やっぱり 同じだ 俺たちは同じだ
そいつが 何より むかつくんだと
昨日は 別々に 吐き散らしたゲロを
今日は 互いに ズルズル舐め合うのか？
君は 最近 よく怒っている
その上 怒ることに とっくに 疲れている
怒って 怒らせて 怒らせられ また怒らせ
そんな どんどん スピードの 上がっていく
無限の ライン作業など もう 御免なんだ！
だったら どうして 君はまだ 怒っている？
どうして 一思いに ラインを 止めないんだ？
止めなよ だが待て ボタンは どこなんだよ？

どこにも 停止用の ボタンが ないじゃないか！
ないって どうする それなら どうするんだ？
元々ない 停止用の ボタンに 「あれよ！」と 怒るのか？
それより ラインを 根こそぎ ぶっ壊すか？
君の 最近 積もりに積もった 渾身の怒りをぶちまけて？

お金を預けるからついて来た金利
今までの金利はそれが常識だった
金利がつくからタンスに仕舞うより
銀行に預けて運用した方が得だった

同じ様に銀行が日本銀行へ預けると
今までは金利がつくから得をしたのに
今年の三月からマイナス金利になると
金利とは逆に手数料を払うらしい 何！

銀行は日本銀行に預ける金額が増えると
手数料も次第に増えて逆に損をするから
会社の方へ沢山貸出すようになるだろうと
予測しての決断だったらしい日銀総裁の力

ところが銀行は国債を沢山買出したらしい
国債の金利もみるみる下がってマイナスに
国債を買ったまましていると損をするらしい
このままでは心配だ！マイナスだらけの国

何時か家庭の主婦が銀行に預金する時も
手数料を払ってお金を預けるのだろうか？
何時か退屈な人が会社へ働きに行く時も
スポーツジムの様にお金を払うのだろうか？

「殿、これまでにございますな」

ひたすら模範的な余が何ゆえ...であろうか

「この二年、月見櫓に行っておられませんな」

「この頃お庭が荒れてございます、殿う」

奥よ、あれは先の領主の風流で意味がない

「でも万両の実をみると爽やかに微笑んだのは殿う、でした」

「殿、敵の城には富士見櫓もございましたな」

あれこそ無用の長物じゃ、佐馬の介

「殿う、月も富士の山も佳いもんです」

そち達は何が言いたい

「殿、我らは星勘定にこだわり過ぎました」

「殿う、最後に無用かどうか月とお話くださいますか」

阿弥陀ほとけを拝まなん
そう 住職は謳うように唱えた

その眼には
敵機に街ごと焼かれた死体が
まだ ごろごろと燃えくすぶっていたのか？

阿弥陀ほとけを拝まなん
そう 唱えた住職はもういない

河川敷には
級友にガソリンを掛けられた死体が
まだ ひっそりと燃えくすぶっているのに.....

駅改札口付近に居並ぶ人たち
バスが到着するたび口々に呼びかける
被災地への見舞金

私はこの通りを
気ままに歩いて行くことは できないのだろうか
ここへ来る前にもあった募金の呼びかけ
行く手をふさぐ声にたじろぎ
一枚の大きな硬貨を入れ息をついた
自身の 見せかけにも近い善意と感じてしまったから

今度の駅では
子供たちの甲高い声が追いかけてくる
目の前に並んだ白い箱
少年チームの旗が翻る
顔をそらし 知らぬ気に通り過ぎる人もいて
少年たちは空振りのような気まずさに
顔を赤らめる

行く先々で求められる義援金
隠れようのない駅前広場
仕方なく 残っていた硬貨を募金箱へ入れた
札を入れることもないだろうと
一人 胸の内をつぶやき 答えを出して
年金生活者という無力な者には
それしかないのだから

あの日にあった あんなこと…… や
こんなこと…… も 失ってしまい
悲しみだけが残された人の
胸の内を少しでも明るませることができたら
と 迷いながら

無力な私にできることはわずかばかりの応援
間違えなく届いてほしい

角の郵便局前に
老いた年金生活者たちが並んでいる

*W・B・イエイツ全詩集

老いた年金生活者の嘆き（北星堂書店 鈴木弘訳より）

ひびわれた夢の跡をたどるように
穴のあいた壁の縁を凝視して
人の情の染み込んだ
甘美な味覚が泥の絵を這う
不規則の亀裂をかすかに刻んで
過ぎゆく時の流れを忘れさせる
生活の匂いの懐かしい傷跡から
稗の飯と
大根と菜ッ葉と雑草の匂いを香いで
かまどの煙が草葺屋根を翔ける
苔の生えたわら屋根から
したたり落ちる雨だれの糸を数えて
青々と茂った草の葉を踏み分けながら
空の天気の方角に未来を馳せる
金鳳花や薊の花の影絵を踏んで
何処までも草の原を歩いて行きたいと
緑の地平線を泥の壁に写して
濁った土ほこりの風塵にむせる
腐蝕した土気色のわら筋をみせて
灰黒色の斜影を軒下に落して
屋根裏の位置が空白を語る
子守唄も昔話も
みんなあの煙から消えてしまって
残っているのは
爺婆の皺の跡だけだったとしても
語るものは語り終ってしまった後の
何ともさわやかな壁の色の素朴な風彩から
小さな穴の向こうに
また一つの眼光を据えて
過ぎゆく年月の映像を記録しようと
ひびわれた壁の地図を
何度も何度も四方八方にたどってから

崩れ去ったものは何だったろうかと
蜘蛛の糸を静かにたぐりよせて見る

外国人に日本語を教えるには
日本語教師資格が今は必要だ
四二〇時間の講義と実技では
やはり十分とは言えないようだ

専門が中国語の彼は独り北京へ
妻と子供を日本に置いての旅で
夕食には香港人を装って食堂へ
不安でも何も持たずに彼は素手

独りで街の食堂に入る時は異邦人
日本人ではやはり緊張するようだ
しかし味は何処でも同じ芋と人参
人間の交流も実感すれば同じ味だ

大学の教室で教える時には日本人
純真な学生たちは何処でも同じだ
数々の日本語の質問にも獅子奮迅
微妙で即答できないのも日本語だ

必要以上に警戒しないでいるらしい
真の中国人の心が理解できるだろう
未来の意味も含む日本語動詞の現在形
そのことも中国人に理解して貰おう

糸車を前にして
昔話を語ってくれた老婆は亡く
沈黙だけが現在を語ってくれる家屋に
数十年の人間の足跡を消して
地上に崩れ落ちるだけの存在から
雪に埋もれた黒光りする板戸の影
誰も住んでいない一軒の廃屋から
紡ぎ出されるありし日のたたずまい
額に汗したこともあろう
吐息をもらしたこともあろう
夢の褥に涙したこともあろう
ここにあるものは冷え冷えとした
過ぎた日を拒む時間と空間なのだが
糸車は今も過去の時間の中で
回り続けている
それは永遠に回りつづけるだろう
誰も知らない時節が訪れようと
廃屋が崩れ去ろうと
かつて生きた者の歴史は消えはしない
たとい他人の目から消え失せようとも
確かに生きた者の事実は消えはしない
人は生き人は死んで行く者だったとしても
人は去り人は離れて行く者だったとしても
昔話に語り明かされた
いろり火の色は消えはしない
薪の燃える炎の勢いにまかせて
糸車の回転の音が軋しみ
老婆の声が神に似る
その日そのとき
今は無い遠い時間から
呼び戻すことさえないこの家屋に
沈黙だけが重い空白を語っている
破れ戸の奥に暗い座敷が鎮座して
いつまでも誰かが来るのをまっているだろう

冬の赤城山の麓をゆったり流れる渡良瀬川
この季節はきりりとした空となる
川は少しでも寒風を和らげようと静かに流れる

おやっドライブ中のトラックに蝶が小休止
ラジオから漏れる井上陽水をつややかなメロディー
蝶はバンパー席からじっくりと聴いている

あの蝶はおみなえしの蜜を吸ってた彼かしら
たおやかにすすき揺れる渡良瀬川
いわし雲も思い治したように晴天に遊ぶ

対岸ではいよいよ冬の色
今日は久しぶりの小春日和
垣根から顔をだした残り少ない熟柿もゆれた

東京西郊に高架線路が続く
近未来の鉄道かも知れない
人も車も横断することがなく
我が道を行くには都合が良い

都心は自分を失う時間ばかりで
自分に意義が無くても良かった
思えば皆と同じに生きることで
都会の憂鬱ばかりを嗅いでいた

考えてみれば田園と都市が一緒に
何か弁証法的な鉄道名ではないか
郊外から都心へ通勤しない生活で
無駄の無い人生のようではないか

田園都市線と新幹線に共通する
同じ処が二つあるのに気付いて
田園と都市が心の中で融合する
矛盾が矛盾でなくなった心の糧

それでは共通点をお教えしよう
二つの線には踏切が無いことと
名前に「ん」が三つあるでしょう
そんな謎解きに勇気が佇む窓の外

そんな！
あたしはあんたの代わりに
罪をかぶって 刑務所に行ったのよ！
その時 あんた約束したじゃない！
出所したら
お金をくれるって約束したじゃない！
頂戴よ！ お金を頂戴よ！
テレビの
お昼のロードショーの画面で
お馬鹿な
美人の
やさぐれグロリアが
ブロンドを振り乱して喚いている
泣かれた男は
にやにや笑っている
愛しているんだ
愛って言ったら
そりゃもう
カネよりずっといいものだよ？
そう言って
甘く抱きすくめたら
この俺さまの魅力を以てするなら
女なんか すぐ
ふにやふにやになって
屈辱まみれの刑務所暮らしも
約束も もうどうでもよくなって
ああ！ 愛ってやつはやっぱり素晴らしい！
おまけに もれなく セックスの快樂も！
...なあんて 考えているんだ
小鼻をひこつかせて

馬鹿にしないでよ！
グロリアは叫ぶ
それでも 男はのしかかって来る

終わりだ！ それをやられたら終わりだ！
やさぐれグロリアは必死で抵抗する
ばかやろう！
死ね！ ばかやろう！
結局 彼女が怒っているのは 男なのか？
それとも こんなにゲスな男を
まんまと愛して信じた 自分なのか？

お馬鹿な
美人の
やさぐれグロリアを
見ながら 俺は 心がうずうずする
俺も 今まで
こんなふうにして
愛とか 何とか
べらべらしゃべりながら
にやにや笑って のしかかって来る
ゲスな ハレンチな 大きな力を
ばかやろう！
死ね！ ばかやろう！ と
何べん 血相を変えて 罵り続けたか
聞いてくれ！ みんな聞いてくれ！
このクズは...と
何べん 路上に走り出て 訴えたか
それでも 人々は きよとんとしながら
顔を見合わせて こう言ったものだ
だけど やっぱり 愛って よくない？
愛の前では カネって 小さくない？
なのに どうして？
どうして 許さないの？
だって 思うに
愛の人なんでしょ あなたって？

うるさい！ やかましい！ 黙れ！
よっく聞け！
その昔 峠三吉は
『原爆詩集』の「序」でこう叫んだ
「わたしをかえせ わたしにつながる

にんげんをかえせ」と

グロリアも

あの お馬鹿な ブロンドの

やさぐれグロリアも

叫んでいることは 実は同じなんだ

「お金をよこせ！ お金につながる

正義をよこせ！ 純情を返せ！」

俺も同じだ！

そうだ！

「にんげんの にんげんのよのあるかぎり」

黙るなグロリア！

叫び続けろ！

「頂戴よ！ お金を頂戴よ！」

午前八時 被災地支援ボランティアセンター前の広場に集合。昨夜 事務室前に貼られたスケジュール表により 持ち場を決められ 点呼を受け 十分に気を付けて作業をするように、とのセンター長の注意から一日が始まる

昨日までの作業を終えて午前中に帰る人 今日の予定作業を終え 夕方になってから帰る人もいて この人たちも名前を呼ばれ みんなからねぎらいの言葉と拍手をもらう

誰もが厚底の長靴や 頑丈そうな作業靴をしっかりと履いて。ヘルメットの顎紐をもう一度確認する人 タオルの鉢巻を結び直す人 ペットボトルの水を飲んで緊張をなだめる人それぞれに エンジンを掛けて待つ指定のワゴン車に乗り込む作業は水路の修理 倒壊家屋の撤去 集められた瓦礫の運搬

作業に出る女性はサングラスに深々とした帽子 顔を覆うマスク 長袖シャツ 裾を絞ったズボン 服装に現われた覚悟 彼女は派遣社員の契約が終わってから来た もう一月近くになる あと少しの予定 定年退職直後という男性は当分動けると ドクロ柄のTシャツを着た青年はバイクで北海道を一回りして来た まだ余りのある体力 一週間ほど作業をして行く 出来る人が少しずつ出し合った時間と体力

就職先が内定している女子大生 今が時間的に一番余裕のある時かも知れない 夏休みいっぱいを過ごすつもり そんな張り切った気持ちだったが 体力的に無理だった 一日の作業が終わってセンターに戻ってきたとき 襲われた目まい 医師の診断は強制的休養 一日を宿舎で寝ていること

私たちがいるのは 廃校となった高校 ここは多目的ホールだったのか 五線を引いた黒板や 天井近くに巻き上げられたスクリーン 一人に与えられたスペースは 身の回り品を置いて確保した畳一畳分の広さ 背中が痛い

その日私たちは 仮設住宅の集会所で 健康相談に来た人たちの受付を手伝い 復興支援金を得るための 袋物や毛糸の帽子などの手芸品作りを手伝い 集まってくれた人たちに お茶を淹れたり その人たちの話を聴いたりしていた 午後三時過ぎ センターからの迎えの車に乗った 他の場所で地区のイベントを手伝っていた人たちも 先に乗っていた

集会所の外まで見送りに出てくれた人たちとは 手を取り合って別れを惜しんだ 迎えの車は 元高校の調理室で 自炊をする私たちのために 食材が十分に揃ってはいないスーパーマーケットへ寄ってくれた 駐車場のアスファルトは ひび割れてうねったまま 薄闇の中 積み上げられた瓦礫を独り片付ける人がいた

あの日から五年近くが過ぎようとしている 仮設住宅にいた人達 どうしているか 気になるまま 今となっては何もできずに 歯痒さばかりを感じている私だけだ。



三浦逸雄 「夏の午」 8号（アクリル 紙）



三浦逸雄 「冬の夕」 8号（アクリル 紙）

ある同人誌に、昭和五十年代の日記を載せている女性があった。その中の十二月のある日の記述にこんな所があり、事実としてはどんなものかと思った。

「何か自分が汚れてくる気がしてならない。何とかの賞の候補になるには0000万円かかるとか。嫌悪を感じた」。

私はその昔、三大新聞の一つの文芸担当記者から、「君、賞を貰おうと思ったら、運動しなくては駄目だよ」と言われたことがある。私のよく知っている記者で、佐藤春夫のところに当番のように出入りしていた者である。その記者自身小説を書いていたが、運動したのかしなかったのか、生涯一度も賞を貰ったことはなかった。選挙運動に金がかかるように、文学賞に当選するには、何らかの手立てが必要ということらしい。文学賞の候補になるのに0000万円かかるという風評の金額は、かつて聞いたこともない数字である。0000万円の最低は一千万円である。金を沢山持っても仕様がなから、小説でも書いて賞を貰い、世間に名を広めたいという俗悪な虚栄の然らしむるところと言うしかないようだ。

そこで、である。私は随分前に、芥川賞の選評の所々を抜き書きしておいたノートを取り出して、前記の運動の気配が何処かにないものかと調べて見た。ところが、選考委員諸氏の所見は小説を読むよりもリアリティーがあって面白く、運動のことなど、どうでもよくなってしまった。例えば、第八十二回下半期の選評では、安岡章太郎がこんなことを言っていた。

「文学をやる以上、文章のことを考えるのはアタリマエのことであった。いわゆる“第一次戦後派”の諸氏が登場したとき、そろって悪文家ばかりであると言われたものだが、いまや彼等が悪文家であるとは誰も言わない。現在では“悪文”というに足るだけの文章もなくなってしまったのであろう。あるのは何とかカルチャー・センター式の、平凡な、紋切り型の文章ばかりだ。

そんな中で「肌ざわり」は、とにもかくにも一個の文体らしいものを感じさせる作品であった」

「肌ざわり」は尾辻克彦の小説であるが、当選には至らなかった。この時の受賞作は森禮子の「モッキンバードのいる町」だが、丸谷才一は褒める方には回っていない。

「いちおう無難に出来ているソツのない小説なのだろうが、わたしには印象の薄い作品であった。在来の日本の小説の書き方を大人しく習い覚えて、ちょっと変った題材に当てはめただけという気がして仕方がない。そして小説技法の身につけ方にしても、まだずいぶん拙いように見受けられる。

殊にいけないのは文体に冴えがないことで、素人としては上手の部類にはいるかもしれないが、小説の文章ではない」

選考委員はそれぞれ自分なりの批評の尺度に従って作品評価をするのだが、その所見を読む側は大体において、褒めるよりも貶す口振りを面白がる傾向がある。前回安岡から少し褒められた尾辻克彦は、八十四回上半期の選考では、中村光夫によってかなり厳しく、その弱点を突かれるのである。

「闇のヘルペス」は話術の巧みな小説で、その点では群を抜いています。しかしこの故意に無秩序を意図した構成が全体として効果をあげていないので、混迷がただ混迷にとどまって、作者が何を言おうとしているのか伝わってこず、ただいい気になって読者をふりまわそうとする印象を与られます。

読者を弄んでいるという感じは「一九七三年のピンボール」にも共通します。ひとりでハイカラぶってふざけている青年を、彼と同じように、いい気で安易な筆づかいで描いても、彼の内面の挙止は一向に伝達されません。現代のアメリカ化した風俗も、たしかに描くに足る題材かも知れない。しかしそれを風俗しか見えぬ浅薄な眼で捕えては、文学は生まれ得ない。才能ある人らしいが惜しいことだと思います」

「一九七三年のピンボール」は、今を時めく村上春樹の作品で、八十一回上半期にも候補に挙がっているが、その後の選考で受賞したという記憶はない。尾辻の方は翌年の八十四回下半期の選考で受賞している。栄枯盛衰世の習いで、村上の名は世界に広まっているものの、影の薄くなる人の方が多いのが世の常である。人気稼業の宿命というところであろうか。

続く八十五回上半期の受賞作は吉行理恵の「小さな貴婦人」で、これはなかなか評判の良かった短篇小説である。それでも丸谷才一は、一般論として次のように言う。

「候補作八篇の二篇だけがいくらかましであとの六篇は問題外だと思った。どうしてこんなものが予選を通過したのだろうと、狐につままれたような気持ちで考えこむのが読後感の大部分、といった作品が多すぎる」

これに同調するように、一步踏み込むのは遠藤周作である。

「今の状況では年二回も芥川賞を出すのはどうかと、この頃いつも思う。年一回で十分なのではないだろうか。前回（一月）にも書いたが、あきらかに候補作品の水準が年々、少しずつさがってきているようだ。今度も前回に比べて、ほぼ同程度か、それ以下だと感じた」

こういう悲観的な現状分析、つまり先の見通しの中にあって、珍らしく褒め言葉を繰り出すのは中村光夫で、吉行の作品がよほど気に入ったようである。

「以上のような小説の怖さを知らぬ、どこか呑気に書きながした作品とならべると、吉行理恵氏の「小さな貴婦人」は、小品ながら段違いの出来栄です。

これが小説と言えるか、我儘な感覚の氾濫が、たとえ猫の形をかりても人間の世界を描いているか、というような疑問はいくらでも出せましょう。

しかし作者の純潔な、同時に宿命的な猫への執心が、或るものに達していることはたしかなので、小説を文学的な感動を生む散文とする大正期の思想が、ここにひとつの実を結んでいます」

ここでもう一度、前記遠藤周作の不満を含んだ選考所感を出そう。

「自分の感覚と自分の文章を持っているのは吉行理恵さんだけで、この事は誰の目からみても明らかだった。

もう一つ、今回は五人もの女性の作品が入っていたが、女性の候補作家にはえてして人間をイヤな目で見るのが文学だと錯覚している人がいる。ひねくれた眼、不信の目で人間を眺め、そう書くのが文学だと思っている人がいる。そして技術だけが悪達者になっているが、読んでいても読了後も作品の底から読者をうつものがなく、こちらを疲れさせるだけだ。結局人間が描けてい

ないのである。人間をはじめから不信の眼鏡でながめている点、一種の偏向小説になっているからだ。

そうしてこういう作品はたいてい、他の候補作品とどこか同じものがあって、違っているのは作者の名だけだ。そういう作品が毎年、候補作のなかに二本くらいはある。

私は芥川賞は年に一回で十分だと最近思う。授章作品など、そう滅多にでないほうがよいような気がしている。なにしろ新人賞があっちにもこっちにもあるのだ。そうでないと芥川賞の水準が低くなる。しかしこれは一銚衡者の個人的な感想であって、世の中はそうは運ばない」

遠藤の作品選考に於ける苦情はこの程度だが、安岡になると、嫌気のさしていることを隠さず述べる。

「今回も一五〇枚、二五〇枚といつも、短篇と呼ぶには長過ぎる作品が目立った。勿論いくら長くたって内容がそれにともなっていれば文句はない。しかし今回の候補作をみても、空疎なものを長々と引っぱって小説なりと称しているのは困りものだ。ノド自慢なら途中で鐘を叩いて終わらせることも出来ようが、小説は最後まで読まないわけには行かないので、選者は疲労困憊させられた」

芥川賞も八十何回ともなると、時世も変ってきており、生活も豊かになって気の弛みが全体に広がるのである。悪貨は良貨を駆逐するというが、それは規制緩和の結果である。選評の基準を低くすれば、本来なら落選するものが当選するのは理の当然である。しかし評価の基準を引き下げてでも当選者を出すのは業界の事情である。遠藤が言うように「世の中はそうは運ばない」のだ。遠藤でも安岡でも芥川賞作家だが、二人が受賞した時、選考委員諸氏がどんな所見を述べたか、一寸覗いてみよう。選考委員の気質が現れていて面白い。受賞順は安岡の方が先だから、それから行こう。第二十九回・昭和二十八年上半期の選考会である。（つづく）

注 引用した同人誌は「街道」。作者は木下径子氏。

丹羽文雄 = 安岡章太郎の「悪い仲間」より「陰気な楽しみ」の方を、私はとる。このひとの受賞は妥当であった。戦後に現れた作家のなかで、私はこの人ほど才能のゆたかな、ユニークな作家を知らない。こういう作家はえてして借りものが多いのだが、このひとは素質だ。この傾向の小説家はあんがい多いのだが、このひとが出たことによって消えてしまう作家も多いのではない。

宇野浩二 = 今度の候補作品の中には、普通に言えば、上手に思われるのが幾つかあったが、妄語ついでに云うと、これらの小説は大抵臺が立っているように感じられた。（『臺が立つ』とは一年頃が過ぎて初々しさがなくなる、という程の意味である）しかし、又、「臺が立つ」程であるから、うまい事はうまいけれど、『塵の中』や『落落の章』では困るのである。それから『好きな絵』は、一しょけんめいに書いてあるのに好意は持てるが、結局、この小説も、「困りもの」の一つである。「困りもの」といえば、『からかさ神』も、『猿』も、『黄土の牡丹』も、『らぶそでい・いん・ぶるう』も、作風はそれぞれ違うけれど、やはり「困りもの」だ。『困りもの』とは、「処置に困るもの」あるいは「もてあましもの」という程の意味である。一中略— 私は、この四つの作品を読むのに、ほとんど持て余した。それから思うと『恋文』には初々しさがある。しかし、この作品は幼稚すぎ、『喪服』は物たりない。そうして、最後に残された『悪い仲間』と『陰気な楽しみ』は・・・私はこの二つの作品に首をひねるのである。簡単に云うと、『陰気な楽しみ』は、ずっと読めるが、たよりなさ過ぎ、『悪い仲間』は、『愛玩』よりずっと落ちる上に、趣向は面白いけれど、荷が勝ち過ぎているように思われるのが気になるからである。しかし、又大冒険をした藤井がミソとニボシを買ってくるころなど読むと、なかなか味をやるんだ、と思った。そうして、こういう『味』はこの人独自のものである。唯、老婆心を承知の上で、この有望と云われている作者に望みたいのは、大ていの人に『好意』を持たれているという事に、大いに警戒してほしい、という事である。

石川達三 = 安岡君の二つの作品は、特に問題にはなるまいと思っていた。それが当選ときまったのは意外であった。反対した私は責任上、翌日になって、もう一度読んで見たが、やはり納得できない気がした。

「陰気な楽しみ」は感覚だけの作品と云ってもいい。それが、末梢神経だけの感覚であって、それだけで終わっている。それ以上のものが私には解らないのだ。「悪い仲間」について、臼井吉見君が、（葛西、牧野、太宰とつながる一すじの私小説の末に安岡の新種を加えたのは興味がある）と云い、（自分という空虚な存在）を語った（空虚な明るさ）に新しい意義があると書いているが、それはそれとしてわかるけれども、私はちっとも新しいとは思わないのだ。

船橋聖一 = 「陰気な楽しみ」の方は、未熟なもので、安岡の欠点ばかりのようなものだ。前者を受賞作品にすることは、前々から度々候補になった彼の経歴によって、納得出来るが、後者まで一緒に採用したのは、安岡にのみ、点が甘いようで、公平とは云えない。

坂口安吾 = 独特の観察とチミツな文章でもっている作風であるから、流行作家には不適格かも知れないが、それだけに熱心な愛読者には本がすりきれるほど読まれるような人だ。その点で、井

伏鱒二や太宰治に似ているが、リズムやトボケ振りは前者よりも表面には出ておらないし、ニヒリズムも自意識も自虐性もタシナミよく抑えられており、沈潜、老成のオモムキがある。子供っぽいドタバタ騒ぎが主として題材にとられていても、その作品の根には沈潜老成というようなものが感じられるのである。後から現れてきただけの意味があると云うべきであろう。

「陰気な楽しみ」と「悪い仲間」は氏の作品のうちで出色のものとは思わないが（過去にもっと傑出したのが二三あった）この作家はいかにも芥川賞の作品でございというような物々しい大作には縁遠い人なのだから、このような独特の作家の場合は一作について云々すべきではない。一冊の本にまとまり、ある人々に熱烈に愛読されれば足りるので、それが芸術の本当の在り方ではないか。月評氏の批評の在り方と相容れなくとも、芸術とはある人々に本当に愛されるに足れば充分だ。実に淋しい小説だ。せつない小説である。しかし、可憐な、愛すべき小説である。

安岡については、かなりの紙面を費やしたが、それぞれの選者の所見が面白かったからである。然るに、遠藤が当選した第三十三回・昭和三十年上半期の選者については、私はどうしてか、石川達三と船橋聖一の所見しか抜書きしていない。しかも遠藤の名を出しているのは船橋である。

船橋聖一＝段々フルイにかかって、最後に、澤野と遠藤が残った。一中略― 結局遠藤周作の「白い人」が残り、これを授賞作にすべきか、該当作ナシにして、「白い人」を候補佳作とすべきかは、一応問題となり、一時はナシにきまりかけたが、司会者の運びのうまさ（これは名人芸に値した）につりこまれて、やはり授賞作となった。然し、遠藤が、受賞後、ある新聞に、「小説は評論の補助的勉強」と云っているのが、僕の不安は、当ったようなものだ。僕が彼に一票を投じきれなかったのは、果して小説一本で行く人かどうかを疑ったからであった。

賞の選考は大体こんな経過で興味深いものはあるが、読物ふうにもっと面白くその経過を取上げるとすれば、遠藤の受賞より一年前の、第三十一回・昭和二十九年上半期の選考会がそれに当てはまりそうである。この時の候補者は、受賞者になる吉行淳之助の他に、今も盛んに活躍している曾野綾子や、後年受賞する庄野潤三、小島信夫、それに富士正晴、太田洋子、川上宗薫等の名がある。私が選評を書き残しているのは、石川達三、船橋聖一、丹羽文雄、三氏のものである。それを列記しよう。

石川達三＝委員会の翌日、もう一度、（驟雨）を読んでみたが、私には満足できなかった。吉行君には気の毒だが、この当選作について世評は芳しくあるまいと想像する。もしも世評がこの作品を認めないとすると、それは銚衡委員会と読書界とのずれであるという事になる。しかし当選と定めたからには今後の吉行君の努力、殊に文学態度についての反省を望みたい。

私の考えでは（村のエトランジェ）（遠来の客たち）（その掟）この三つの中だと思っていた。殊に後の二つが有力だと信じていた。ところがこの二つを支持したのは丹羽君と私だけであったのは意外だった。作家としての力倆から言えば（その掟）が第一だ。しかしこういう感覚的な描写が案外委員に支持されていないということを知ったのは、私にとって一つの勉強になった。だが、この作者は必ず伸びる。作者が落選に失望しないことを望む。

いつも委員会で丹羽君と私とは不思議に意見が違うのであったが、今回は（遠来の客たち）の

新しさについて、私と丹羽君だけが強く認めたのに、他の誰もが認めなかった。この喰い違いは研究されなくてはならない。私の考えでは、これこそは戦後のものであって、私には船橋君にも宇野浩二さんにも書けない新しい性格の文学だと思う。それを作者は平然として、すらすらと何の苦労もなしに書いている。苦労なしに書いているというところに本質的なものがある。これは私にとって、又は今日まで日本文学にとって、「異種」である。この異種の新鮮さを育てるのが芥川賞の使命ではないか。

船橋聖一 = 小生は、野口と江口を推した。一中略一

今度の銚衡は、稀にみる白熱戦だった。

おたがいに、なかなか譲らない。が、段々に篩にかかってきた。何番目かの篩で、江口が落ちる番がきた。

反対者は、あまり理由を云わなかった。云うまでもないという理由かも知れない。然し、案外、理由にならない理由で、反対していることもありうる。

江口は文章上手である。よく読ませる。そして、有情滑稽がある。泡鳴も文壇人にきらわれたが、文壇人の江口に対する評価には、誤解が少くないのではないか。もつとも彼は、度々、禁酒を宣言するが、すぐ破ってしまう。酒癖がいいとは云えない。

とにかく、小生は「近所合璧」を面白く読んだ。

江口の落ちたあとは、野口、吉行、曾野、小沼、庄野あたりが競合ったが、つづいて野口、庄野、曾野が落ちた。曾野を一緒に一所けんめいに推していた丹羽と石川が、曾野が落ちたので大層口惜しがり、

「後は棄権じゃ」

と云って二人共、席を立ててトイレットへ入ってしまったのは、ユーモラスな風景であった。

丹羽文雄 = 曾野綾子は掘出しものではないか。一中略一 新鮮な作風であり、感覚もユニークである。これは素質的なものではないか。私と石川があまり感心していると、そんなに天才じゃないですよ、丹羽君の好きな作品でしょうと川端さんは笑ったが、惚れこんだ私はすこしも後悔していない。(つづく)

昭和四年の『文芸春秋』三月特輯号の表紙の裏には、山之内薬品商会の「淋疾に粉末白檀油ブルサン」なる広告がある。現在の『文芸春秋』は恐らくそんな如何わしい宣伝文句は載せないだろうが、何せ昭和四年といえば、ニューヨーク証券取引所の株の大暴落から、世界の大恐慌が始まる年である。この広告がそれを予告しているわけではあるまいが、この恐慌は言わば経済上の重病であった。後世の今から見ると、この広告は如何にも皮肉であるが、もちろん当方はこの関係をまことしやかに論議するつもりはない。こんな広告とは別に本体の目次を見ると、今日なおその名を残している人達が、この号に執筆しているのである。その中から一つだけ取上げよう。

「特輯読物」と題した作品の中に、日夏耿之介の「モダン詩風傍観」があり、読んでみると以外に面白いのである。今日その分野で聞こえる詩論に比べて何ら遜色がないどころか、今の人では簡単に太刀打できないのではあるまいか、と思うほどである。当方日夏を特別鼻眞にしているのではない。日夏自身の詩そのものは高踏的であって、当方の手に負えるものではない。高踏派の詩というのは難解の部類に属する。難解な理屈をこねる人は難解な詩を書く、と言った西洋人がいたように思うが、その伝で行くと、日夏は難解な理屈をこねる詩人ということになる。しかし、実際にその言うところを読んでみると、それは必ずしも難解ではない。日夏はその当時の若い詩人を勇気づけるように、こんなことを言っているところもある。

「筆者はいう所のモダン文学者の一人である光栄を完全に有せざるもので、且それを根本から欲せぬ組ではあるが、自分の文学観の立場から云っても、現在あるがままの世相の一部の反影たるモダン文学、そのもののためから云っても、青年士女の手によるモダン文学徹底策には根本的に賛成する一人である。すなわち、詩壇は青年がもっと力を占めていなくてはいけない。むやみに狂犬のように吠えつく自瀆的新派詩人は、あまりに名利にのみ飢えて、自分の教養本質のほどを些かも顧みぬから、彼等にたよる事は出来ない。もっと純で、もっと生一本で、もっと自己凝視の鮮かな青年一派によって、詩壇に於ける只の一砦であるモダン詩林を、もっと同時代的に力あるものに改造すべきである。行きつく処まで行ったらいさぎよく仆れるべきである」

尤も、これだけでは、文章にそれほどの難解さはないにしても、その言わんとするところは明瞭に読者に伝わらないうらみはある。つまり自分にだけ解っていて人には解らない、という独り善がりなところがあるように見えるからだ。しかしそれは筆者の責任ではなくて、当方の引用の仕方が適切を欠いているためだと言うべきであろう。日夏は詩人であり英文学者でもあるから、詩のありかた、詩の行先に目を据えてものを言っているのだから、それを旨く紹介すれば、この稿は許されるのかも知れない。しかも日夏は特別変わったことを言っているのではない。現代詩に対して何らかの疑問や懸念を持っている詩人なら、誰でも言うべくして言うことにすぎない。そういう視点から、これなら納得が行くだろうと言えそうな箇所を出してみよう。

「今日の詩歌は、高級と自称し且他称するものになればなるだけ、発声して歌うことに適していない」

この日夏の見解は、平成の現在でも通用するだろう。日夏はこの後、自分の経験を語る。

「われ等は小石川の京北中学に在学当時、一高前のシルコ屋梅月に集って短歌新体詩の創作吟誦会をしばしば開いたものであった。明治三十七八年の交である。創作翻訳の佳詩篇と称された薄田泣菫の「白羊宮」中の「あゝ大和にしあらましかば」や「望郷の歌」、蒲原有明の「有明集」中の「智慧の相者は我を見て」や「痴夢」、上田敏の「海潮音」中の短唱など盛んに高吟朗唱したものであった。一種の誦し方が自然に存在して（いろいろ違った誦法があったが）その誦吟法に拠って声一杯に歌ったものである。一時代前の島崎藤村、土井晩翠、与謝野鉄幹などの「おえふ」や「星落秋風五丈原」や「人を恋ふる歌」は尚更朗吟しやすかったものである」

これで見ると、当時、詩は朗読ではなく朗吟するためのものであった。それはそれでよい。しかし何事にも変化はある。朗吟しにくい詩が出現し始めるのである。日夏はそれを世間話風に、こんな話を読者に提供するのである。

「泣菫有明になってすらが、「近頃の詩はどうも歌いにくい、あんなものがよいのですか」などという叱咤的無理解の質問を一昔前の投書家上りの中老人からよく聴かされたものであったが、それが、口語自由時代となつては愈よ甚しく、昔は匿れて駄詩の一篇も「新聲」の三段組欄に投書した事の証拠も上っている三流どこの小説家にしてからが、「昔は

妻をめとらば才たけて
顔うるわしくなさけある
友をえらまば書を読んで
六分の侠気四分の熱

でしたっけかね、今の詩はどうも・・・」と来るその面先に三流戯作者的成功の飽満感がぶら下っているのであるから恐縮して退き下る事一再でない」

日夏はこんなふうに、世間の詩に対する無理解ぶりを、三流小説家を代表にあげて苦情を述べる一方で、詩人の側の問題点を、当時人気のあった詩人の名と作品をあげながら批判するのである。

「当今洛陽の紙価を高めつつあると形容せられる北原白秋、西條八十の短唱といえども、実はあまりに各年齢の広くにわたっては誦されていない。「城ヶ島」や「カナリヤ」は多く青年士女に限るのである」と日夏は先ず二人の詩人を俎上にのせる。ここに挙げられている詩作品は単に朗吟のみではなく、楽器の伴奏つきで歌われる歌曲になって洛陽の紙価を高める以上に、やがて音盤によって世間に広まって行つたのである。日夏は続ける。「野口雨情の「枯れすゝき」に至っては御用きき衆に限るようである。洛陽の紙価を高めるべく努められつつあるといわれる堀口大学の「地震」といえども、銀座少年にまさか大声で朗誦はされないのである。農民青年の間に浸潤すべく努められつつあるといわれる福田正夫、白鳥省吾の「なげきの孔雀」や「明治神宮参詣の唄」？といえども田園山林の間に高誦する事甚しき事例はまだ不幸にして報ぜられられていない。現代名家既に然りである。此等以下に至つては何のために印刷されたかを訊きたい位速やかにもとの塵土に帰しつつあつてかつ青年士女の驕唇に上つた歴史を耳にし得ないのは残念である。白秋、八十、元磨、朔太郎、犀星、省吾、正夫、大学等謂う所の当代名家諸君の一般の耳に熟せる類の作は、不幸にして作詩家の末席を汚す一人である予にとっては、佳作とは思われぬ。遠慮の要らぬ所から八十を例に供するならば、多くの少年士女の歌うところとなる彼の作品は

彼としては大部分凡作であって、かえって少年士女には解されがたき「年」？の如きがその詩人的命脈の支持の左券というべき佳品であるが、この方の詩になると一寸朗誦しにくいのである。而してその佳品とする如きものは、彼の作として所謂モダンの風潮に乗ったものでは決してない。ここに面白い題目が含まれている」

要するに日夏は、この問題をこう結論づけたいのである。

「一般江湖にあって抒情詩は、朗誦的生命の方が他の部分よりも多く興味がつながれるのである。歌えないものはつまらない。歌って而してその詩旨がたやすく呑み込めるものが歓迎せられるのである。これは云うまでもなく今の一般江湖としては当然である」

これは感服して頷かざるを得ないほどの新奇で高度な論説ではない。それでもこの後続く考察は平成の詩人にも共感あるいは納得しうるところがありそうである。蛇足かもしれないが引用しておく。

「朗吟不可能ということが、真詩価の高下に関係のない事という迄もない。すべての詩は唱歌ではないからである。曲譜と相俟ってその特色を初めて発揮するのでは必ずしもないからである。が詩は、「美の律的創造」である。何等かのかたちに於て言語の律的美をも発揮しなくてはならぬ。俳句は詩の一種であるが、（詩でないとは解している学者もある相であるが絶対に予はそうは考えない）

この秋は何に年よる雲に鳥 (ママ) 芭蕉

の名句は必ずしも宗匠的に朗誦するを要しない。すなわち、詩に於ては、そのあるものは、（価の高下に係らず）高吟も出来、あるものは朗誦又は朗読の程度にとどまり、あるものは微吟を以て可とすべく、あるものに至っては殆ど黙読に近き一種の内的微読がその最良の誦吟法というべきである。雲に鳥の句の如きを、もしも典型的の職業的の高吟法によって誦読したならば、その誦法から生じる属性的臭味に毒せられて、さしもの幽玄体もその大部分の妙味を失うて了うであろう。ライオネル・ジョンソンのある種の詩は（たとえば「夢幻僧院」の如きは）到底在留外国人的朗吟法にはふさわしくない。イエエツ最近のエソトリック詩風の如きも同断である。

又、これとは反対に果敢にして率直なホイットマン集中の少数の佳品の如きは、声一杯に張り上げた方が、その詩の妙味を増すものが大部分である。ウオオズウオスにもかなりの声量の朗吟を以て佳とするものが少なくない。テニスンも然りである。スインバアンも然りである。更に少し声を低めて可とすべきものが、ロゼッティやブラウニング中に少なからず散見する。朗誦は性質の問題であって、詩の致命的題目ではないのである」

(了)

昭和初期の物価のことは史書を見れば判る筈だが、同じ昭和でも敗戦後の物価となれば、そこに大きな隔たりがある。一ドル百十円という通貨の交換相場が現在だが、百十円とはどの位の価値か。ビールに似た発泡酒一缶はディスカウントショップで日本製なら百円、韓国製だと七十円で購入することが出来る。この百十円という価格を昭和初期に生きていた人が、墓場から目覚めて耳にしたら、「ウソ！」と叫ぶに違いない。昭和の初期なら千円あれば家が一軒建ったのである。平成の今頃、千円では酒一升買えるかどうか。

こんなことを言っているより、手許にある古雑誌から昭和四年の農家の収入について触れてみよう。昭和四年の「文芸春秋三月特別号」の随筆欄に、結城哀草果という人が「農家雑筆」と題した一文を書いているのである。名前からすると歌人のようにも思えるが、読んでみると矢張りそれらしいところがある。初っ端に「冬の農家 苧織（機械）」という小見出しで、符号のように簡潔な記事がある。私は農家出身なので、この記事に懐かしさを覚えた。

米苧（米俵表装用）拾枚製作原料

縦繩に要する藁、拾六把

横繩、四拾把

右の原料価格、拾四錢五厘五毛

製苧時間

縦繩製作時間、五時間拾四分

横藁製作時間 一時間

苧織時間 三時間

全製苧時間 九時間拾四分

機械に要する諸費用

機械購入費參拾六円の利子、機

械修繕費、機械損耗費、油代等。

二錢二厘

拾枚製苧総費用、拾六錢七厘七毛

苧拾枚価格、二拾八錢

差引、拾壹錢二厘三毛

右の差引残高は、九時間拾四分

の労賃に当る。（昭和四年一月十日調べ）

繩綯（手綯）

荷造用太繩、拾把の原料

藁六拾把、拾五錢五厘

製作時間 拾五時間

太繩拾把の価格、三拾三錢
原料価格、拾五錢五厘
差引、拾七錢五厘
拾五時間の労賃、拾七錢五厘
壹時間の労賃割、壹錢壹厘七毛
一日八時間の労賃、九錢三厘三毛
(昭和四年一月廿四日調)

これは何県の何村のことなのか文中には書かれておらず、「右は僕の村の農家が冬の副業に苧を織ったり、繩を綯ったりして働くその労賃が、幾らになるかを調べてみた」とあるだけである。読んで行くと判るが、藁を使って物作りをするのは、大体雪の降る寒いところである。私も農村育ちだから冬の副業のことは知っているつもりであるが、三厘三毛という通貨単位には些か面食らう。厘はともかく、毛はどんなものか全く知らない。今では一錢銅貨も五厘銅貨もないから、夢物語である。しかし、その時代の人間にとっては何とも過酷な現実であったと言ってよい。一錢五厘の葉書で召集されて軍隊へ行き戦死することも珍しくなかったので、兵隊の生命は一錢五厘と言われた時代もあったのである。

死に繋がる軍隊のことはともかく、農村は雪の降る冬になってまで働けど働けど楽にならないのが実情であった。筆者の結城氏は、「一人の男が、一日八時間から九時間以上休みなく働いた労賃が、僅かに九錢から拾壹錢強にしか当たらぬが、これは嘘のようであって事実である。汗を絞って働く一時間の労賃が、たった一錢一厘強にしかならぬことを知ったならば、誰しものが、その労賃のあまりに僅少なのに驚くであろう」と言う。時代が進むのだから労働条件もよくなってよさそうに思えるが、それは素人考えで、時代が進むというのは機械文明が進んで生産構造に変化が起るということである。農村にいてその変化に注意している結城氏の見解はこうである。

「すべてが手細工でやってをった五六年前は、一日八九時間汗を流して働けば大抵五六十錢の労賃を得たと思う。それが一度機械が農村に入って流行すると、生産過多になり、製品がたちまちのうちに下落してしまったのだ。現在では手細工の時よりも、長時間を働き、多量の原料(藁)を消費して、却ってその一日の労賃が僅少であるという結果になったのである。

手細工をしてをった五六年前までは、どの家でも炉に赤々と薪を焚いて働いてをったが、現在では火の気のない雪の吹き込む土間で、寒ければ寒いほど身を動かして汗を流さねばならぬ哀れな状態である。薪一本が四錢位に当るから、一日薪三本も焚けば、九時間以上の労賃が無くなるわけになるのだ」

こうなると、薪一本が生死の鍵を握り兼ねない危険が生じる。切り詰めに切り詰め、我慢に我慢を重ねるしかない生活がそこにはある。結城氏が農村の副業の成果を調べた昭和四年は、秋になって世界大恐慌が始まる年である。この調査は一月であったから、もちろん恐慌とは関係ないものの、まるで恐慌の後のように不景気である。パニックという心理に囚われていないだけである。どう足掻いても欲しいものが手に入らない哀れを、筆者は晴れやかな都会の生活と対比しながら、一つの例を読者の前に出して、終りに歌を添える。

「村に可憐な娘がをって、外出の時に着る毛布を人並に買いたいと思って、夜毎深更まで掌か

ら血を流して縄緬いをしたが、冬中夜業を励んで、ついに一枚の毛布を買い得なかったという哀れな実話がある。これは毛布を買おうと思い立った娘の考えが無理であって、現在の農村の労賃では、いかに熱心に夜業をしても、冬中娘の手で一枚の毛布を買う金を儲けることは実に至難だからである。

同じ時代の都のをとめ達が、明るい電灯の下で、はなやかに骨牌を切つてをることもしらず、女人芸術社の女史達が、銀座街頭で宣伝ビラを配つてをることも知らず、平林たい子さんがをることも知らず、農村の娘たちは、掌から血を流して毎日藁を打つてをるのだ。さればと言って、

稲春けば輝る我が手を今宵かも

殿の稚子を取りて嘆かむ（東歌）

の古代の娘のように、今の農村の娘達には可愛がって呉れる若い殿子もいないのである」

若い女が毛布一枚買えないために、歌で慰めを言ってもらうような時代があったとは、暖衣飽食で育った世代には信じ難いかも知れない。今では毛布など物の数ではない。蕙だの縄だのは、平成の現代人の何処にも結びつきそうにない。しかし毛布一枚買えないからといって、農村の娘達は墮落したのでも病気になったのでもなかった。可愛がってくれる若い男がいなかったとしても、それが娘の疵になったわけでもない。悲惨なのは昭和四年の後のことである。最悪の貧乏を強いられたのは昭和五、六年であった。史書の記述を借用しよう。毛布を買えない娘達より遙かに悲惨な例である。

「山形県下を通じて借金で首が廻らず、可愛い娘を人身御供に奉って金に換えているもの県下全体で四、五百人はある。そのうち最も極端なものをあげてみると最上郡西小国村の出来事でこんなのがある。この村では十五歳以上二十四歳未満の若い娘さんが合計四百六十七名のうち、売られて行ったものが百十名の二十三パーセント。この外女中や酌婦に出ているものが昭和六年十一月の調べによると百五十名ある。これはみんな借金の犠牲だ」（『日本農業年報』第一輯）

「娘身売の場合は当相談所へお出下さい」という掲示板が村役場のまえに張りだされたというのも、このころのことである。売られた娘たちのなかには女工などもあったが、その大部分が売春婦であったことは言うまでもない。親のために苦界に身を沈めるというのは、歌舞伎の「美談」ではなく、昭和の「聖代」の現実だったのである。

農村の場合には、こういう苦境がとくに長くつづいたことはさきにもふれたが、昭和九年（一九三四）に異常な大凶作が東北日本を襲ったことが、それに輪をかけた。この年の米の収穫は五一八四万石で、豊作の前年に比べると実に三〇%近い減収だった。この被害をもっとも強くうけたのは東北の農村だったが、ここでは文字どおり、山の草や木の根をとってようやく飢えをしのごうような状態がつづいたのであった。農村がほんとうに不況から脱したのは、昭和十一年以降であった」

これは史書が語る残酷物語である。原因は救い難い生活の困窮であった。副業とは言うものの、大の男が一日八時間から九時間働いた労賃が九銭から十一銭にしかない農村に凶作が襲ったら、生活が出来なくなることは誰にでも解ることだ。金を借りようにも、借りる手立てがない。人身売買に行き着くのである。但し、売れるのは女性なのである。不可解なのは、金融恐慌だの大不況だのと騒がれる世の中で、女性を商品と同じように買い取る人種がいるのである。同じ

人間の顔をしながらである。借金に泣く者があるかと思えば、アメリカあたりには一兆ドル以上の資産を持つ超富豪が出現する現代社会だ。話題が尽きぬわけである。この前は東北地方に大地震が発生した。地震ばかりでなく、恐るべき大津波の襲来があった。その二重の災害で原子力発電所が破壊され、そこから最も危険な放射能が飛散した。そのお陰で着のみ着のままで安全な場所へ避難しなければならない人が大勢いた。それで誰も住まない村がいくつも出現した。これは安全のための措置だから止むを得ない。ところが、今更驚くべきことと言えないのかも知れないが、その無人の村に泥棒が入ったと聞いては、流石に唾然たらざるを得なかった。誰もいない家ばかりだから、そこへ車で乗りつけた泥棒たちは、鼻歌でも唄いながら屋内を物色したことであろう。戦争があればあつたで儲け、戦争に負けて平和になればなつたで儲ける人種が、必ずこの地球の何処かにいるに違いない、というようなことを、横光利一が戦後の日記体の小説に書いていたのを思い出す。いかに多くの人々が被災者に同情を寄せようと、何万という詩人たちが悲惨な事態を詩に綴って国民の関心を高めようと、一方ではこの時とばかり、災害の場を滅多にない稼ぎ場所とする人種が存在するのは、昔から言われるこの世の七不思議を一段超えた不屈き千万な現象かもしれない。

(了)

齢を取ったら読もうと思ってとっておいた本が、わずかながら本棚に並んでいる。そろそろそれを読む頃合かなと思って、昨年あたりから読み始めた。こんな古い本を残しても、整理する家族が大変だろうと思う。片端から読んで、それを徐々に棄てて、身軽になろうという目論見でもある。

さて読み始めてみたら、さっぱり面白くない。川端康成など、こんな甘っちょろいもののがいいのだろう、というひどい感想を抱いたりした。石川淳は面白いものもあったが、難しくてよく分からないものもあり、あまり乗れなかった。永井荷風は面白かったが、あまり上等な文学とも思えず、持ち上げられ過ぎているのではないかと思った。通俗作家というのはまさにこういう人を言うのだと思い、見方によっては単なるエロ爺さんとさえ思えた。

とはいえ永井荷風というのは、面白い作家である。友人と話しているうちに、荷風のいろいろな面が見えてきた。以下に荷風のことを、小生の偏見を解放させつつ考察する。

『花火』という大正八年に書かれたエッセイのような作品がある。多くの人が言うように、これは問題作であると同時に、永井荷風という作家の本質を語る上で、鍵になる作品である。明治四十四年慶應義塾に通勤する途中、市ヶ谷で幸徳秋水ほかの大逆事件の被告人たちを乗せた五、六台の囚人馬車が、日比谷の裁判所に行くところに幾たびか遭遇した。その黒い馬車を見ているとなんとも暗い気持ちになる。あの被告たちは無実なのだ、そのことを知っている。本当の文学者ならば、黙っていていいのか。フランスの「ドレフュース事件」のとき、決然と立ったエミール・ゾラという作家が居た。あのゾラのように、どうして自分は立ち上がれないのか。そう自問自答して悩んだ末に、立ち上がれない自分はもう文学者として失格なのだと思い、今後は戯作者として生きてゆこうと思った。『花火』のなかで、ごく短い記述ながらほぼこのように書いている。

よって以後の荷風は戯作者の道を歩いて、紅灯の巷を彷徨い、その女たちの生態を描き続けた。たしかに面白い読み物になっている。戯作と割り切って書いているだけに、普通の文学者のように気取ることもなく、肩の凝らない読み物をサービスしている。人間の真実を追究して深刻になることもなく、安心してそのサービスを受け取ることが出来る。

荷風の人気は今もって衰えることなく、若い読者にも共感を呼んでいる。彼の生き方のスタイルに憧れを抱く向きが、昔も今も多い。自由で、あくまでも洒脱で、捉われない生き方、これは憧れる意味は充分にあるだろう。束縛ばかり多い中に暮らしていれば、こうした存在そのものがひとつの救いになることは確かだ。

荷風の「自由」というのは、筋金入りであって、なかなかのものだ。その真骨頂は戦中にある。戦争が長期化し、太平洋一帯に拡大し、しだいに敗色濃厚となる中で、自由を保つというのは只事ではない。多くの文学者がみな軍部に屈服し、協力した。それも一通りの協力の仕方ではない。衷心から戦争を賛美し、軍を賛美している。戦中というのは、そうした言論しか発見でき

ない。特に本来戦争に反対であったはずの、左翼系の文学者たちが一様に、戦争賛美の文章を「本気で」としか思えないような真剣さで書いている。

そんな非常時の中であって、荷風だけが軍部批判を日記の上とはいえ、やり続けたのだ。そして軍に協力することはついになかった。すべての文学者が所属した「日本文学報国会」にも荷風は入らなかった。内田百閒とともに、「文報」に入らなかったのは例外中の例外だった。

みながなびく中で、何故に荷風だけが「自由」を守ることが出来たのか。貴重この上ない「自由」、誰にも許されることのなかった「自由」を、どうして死守することが出来たのか。この疑問を解く鍵は、唯一「金」なのだ。荷風は大正二年に『ふらんす物語』が発禁処分になって以後、発禁につぐ発禁の連続だった。戦争がしだいに泥沼化する中で、「花柳小説」と自ら称した作品が許されるわけもなく、文学での収入の道は閉ざされたままだった。

おそらく欧米に遊んだときに、彼らの生き方からそうした金に関する対処の仕方を学んだと思う。欧米人の金に対する態度には、日本人と大いに違うものがある。金に対して、その偉大さを素直に認めているのである。金は命の次に大切なものであり、金の持ち様によってその人の価値が判断される。よって、はっきりと要求する。多くのインテリの日本人は「そんなことはわしゃ知らん」という姿勢を示したが。それとは欧米人は正反対である。

荷風は金に執着した。というより金の力を知って、それを存分に発揮させることを意識していた。自由を守り、軍部に協力することなく、戦中を乗り切ったのは金の威力なのだ、と彼自身ごく親しい者に語っている。荷風が亡くなったとき、巨額の現金を持っていたことが、驚きとともに大きな話題になった。金こそが、荷風の生きる目的であり、身を守る武器だと心得ていた。

それにしても、金に対する日本人の屈折した姿勢はなんなのだろうか。サムライだからか。金には執着せず、そんな汚らわしいものには見向きもしない、こうした姿勢を特にインテリたちはとりたがる。内心では金は欲しいのに、「そんなもの」と超然たる態度を示そうとする。「清貧」という言葉がある。みなそれを正しい生き方として、金に執心することを軽蔑する。その傾向は今も変わらない。

ある程度の経済的余裕に恵まれているならば、この姿勢は十分に通用するだろう。しかし一度貧することになると、いかにこうしたサムライは弱いことになるか。戦中の作家たちを見ればよく分かる。作家ばかりではない、芸術家、思想家、学者、すべてに言えることである。軍部に抵抗していた者でも、経済的に余裕ある間は、抵抗し続けることが出来る。しかし生活の糧を奪われる段になると、あえなく屈してしまう。金が無くなった途端、もはや節操も、理想もかなぐり捨てて軍部に屈して、限りなく協力してしまう。これは歴史的事実であり、重要なデータだと思う。戦中のこの文学者たちを責めることが出来るか。平和の中に暮らしていると、いかにも彼らの迷走ぶりが滑稽に見えてきて、許しがたいものに見えてしまう。

しかしこの文学者たちを責めることは出来ない。戦後に至り、戦中の自分を恥じて自殺した人も居た。いっぽうで自分の作品年表から戦中の文を削除しようとした者も多い。反省するより体面を重んじた。あるいは戦時中の自分を贖罪する意味から、共産党へ入党した者も少なくない。これは褒められたこととはいえませんが、戦中の行為それ自体は非難する気にはなれない。人は生活の糧を奪われると、あるいは奪われそうになると、もはや抵抗できなくなってしまう。節操も

、主義主張も、理想も、思想も、なくなってしまう。さらに飢えてくると、人間性さえ失う。飢えて死の影におびえると、人は蛇も蛙も争って食う。人の吐瀉したものさえ貪り食うようになる。人間より動物になってしまう。そのことを非難できるか。飢えに苦しんだ者の一人として、人は動物であり、生きるためには人間性もあっさり棄てる存在なのだと思っている。

数年前、世田谷文学館で「永井荷風展」が開催された。荷風人気は予想以上に大きく、世田谷の閑静な住宅街での展示会にもかかわらず、人の流れは尽きることもない盛況であった。荷風が実際に使っていた身の回り品を、あたかも世界的な美術品を観るように、関心を寄せて観ていた。原稿とか、当時の風俗を示す資料なども、貴重品を見るように熱心に観ていた。

展示品の中に、荷風が小さなノートに、小さな几帳面な字で、株の運用を記したものがあつた。この資料に足を止める人は居なかつた。ちらと見て、すぐに通り過ぎて行くのだった。株相場のことなど自分とは無縁だとばかりに、足早に通り過ぎてゆく人々。金のことなど無視しているように振舞う人々、相変わらずのサムライたちである。

わたしはこの展示品の前から去ることが出来なかつた。熱心に観て、ノートの開けてあるページ以外を、なんとか観たいと思った。これこそ荷風を知る上で、重要な資料だと確信したし、もっとも大切な展示品ではなかつたかと思う。荷風を解く鍵の一端がこの一冊のノートにある。それは間違いのない事実と思うが、何故に人々はそれを無視してしまうのか。

株をやっているというだけで、軽蔑の対象となる。この事実は今でも同じである。銀行の預金をする人が、真面目で善良な市民とされている。これでは荷風の株取引のノートなど、無視するのが普通なのかもしれない。しかしこれでは永久に、荷風の本質を見破ることは出来ない。そして一朝事あらば、あっさり権力に屈するであろう。理想も、思想も、節操さえ棄てるであろう。

荷風は戦中は軍部を憎み続けた。そして戦後、アメリカ軍が進駐してきて、文化人たちがアメリカを諸手を挙げて歓迎した。しかし荷風は独り冷静に、アメリカそのものに疑問をもち、批判する姿勢を通した。

荷風はその健全な判断力をいかなるときも失っていない。ぶれないのだ。あたかも磁石がいつでもぴたりと北を指すように、荷風は冷静かつ正確に全体を受け止め、見通しを的中させている。戦中、敗戦、戦後と時代が大きく変化する毎に、大きく「変心」し、ときに「豹変」し続けた文化人の中にあつて、少しもぶれることなく冷静な目をもち続けた。「恒産なくして恒心なし」という格言を思い出さざるを得ない。

荷風の作品のほとんどを読んだのは、つい最近のことだ。「通俗作家」「エロ爺さん」という感想を抱いたことは最初に書いた。明らかに持ち上げられすぎていると強く思った。文学作品として見たとき、この感想はそれほど的外れだとは思わない。

荷風自身、それほど持ち上げられ過ぎることを、果たして喜んでいるか。苦笑しているのではないかと思えてならない。エロ爺さんは言い過ぎとしても、通俗作家という評価には納得するのではないかと思う。通俗作家を戯作者と言い換えてもいい。そのほうがむしろ彼の本質を表しているし、彼自身が自分を戯作者と認識していることでもある。

ところで二〇〇九年に、荷風生誕百三十年、没後五十年を記念して、岩波書店が荷風全集の予約販売を企画した。死後五十年にして全集が出版されるということは、いかにその人気が高いかを証明している。死後も繰り返し全集が出版された作家は、わたしの知るところでは、夏目漱石、森鷗外、島崎藤村、芥川龍之介、太宰治しか居ない。永井荷風はそれに加わってきた。今後もその企画が成される可能性を考えると、その評価はますます上がっているのであろう。そうなるにますます芸術の高みに押し上げられて、戯作者としての本質が見失われ、荷風の何たるかが不明になるおそれがある。

その全集刊行の宣伝文句をみると、「文豪」「名作」「珠玉」「醇乎」といった文字が躍っている。神々しくさえ見えてくるような有難さである。ご立派な本を開いて、紅灯の巷での女たちとの交流を、そんなに神々しく読むのであろうか。少し変ではないかと思えてしまう。

「芸術の祭壇」に祀り上げられるより、戯作者として愉快地読んでもらうほうが、荷風には居心地もいいだろう。その戯作者としての荷風を押し通すに、彼自身の身の処し方には、学ぶべきところが多い。とはいえあれだけ他の迷惑など無視して、自己を押し通す徹底した生き方というものには真似のできるものではないだろう。むしろそのあたりをもっと注目してもよいのではないか。

(完)

読書録を個人的にメール送付してくれる友人が居て、刺激を与えられている。最近送付されてきた読書録の中に大岡昇平の「俘虜記」があった。この本はその昔何度も読み返して感銘を受けた本だったので、「おお！これは」とばかり懐かしくもあり、すぐさまその本を取り出してみた。久しぶりに手にとってみて、しばしある感慨にふけることができた。

昭和二七年に創元社から発行された初版本で、箱入りの豪華な装丁だった。定価五五〇円、それを古書店において二八〇円で買ったものだった。活字が古く、旧漢字が使われていて、旧仮名遣いという貫禄ある内容だ。巻末にはニーチェ全集十二巻、トルストイ全集二三巻、小林秀雄全集八巻という広告が出ている。今では考えられない出版事情である。ある意味では戦後の出版界の黄金時代であったと思う。当時の若者はこうした本を読もうとしていたことは確かだ。ページをぱらぱらと繰っているうちに、赤鉛筆で印をつけたところがあつて、そこを読んで驚いた。

「広島市民とても私と同じ身から出た錆で死ぬのである。兵士となつて以来、私はすべて自分と同じ原因によつて死ぬ人間に同情を失つてゐる」

原爆で死んだ人間は、身から出た錆で死ぬのだから同情はできない、と受け取れるこのいい方は、あまりに衝撃的で物議をかもしても不思議ではない。読んだ当ても驚いたので赤鉛筆で印をつけたのであろう。この迫力のある一句の前後を読んでいくうちに、以前何度も読んでおおいに感銘を受けたこの書を、もう一度ゆっくり読んでみたくなった。

いざ本書を読み始めてみると、半世紀以上も前に読んだ本の細かい部分まで記憶に残っており、ここも、ここも、そしてここも、とそっくり覚えているところが次々と出てきて、まさにもう一度青春時代を生きているような気持ちになってきた。この感覚は心地よいものである。読んでゆくうちに、一行一行に以前読んでいた記憶がよみがえり、古い友人に会ったような懐かしさと感慨が湧いてきた。そして言葉のひとつひとつ、センテンスのひとつひとつが心に沁みてくるのだった。こんなに自分の感覚にぴたりと合うということはめったにあるものではない。

俘虜という非日常的な生活の観察は鋭く、独自の解釈と分析をして、それを表現するに的確極まりない語句が続いてゆく。本書を読み進むうちに、如何にこの書から多くの観念を学び、それを定着させていたかに思い及び、改めて驚いた。その例をいくつか当たってみたい。

「生物学的には女の部分品にすぎない男は、狩し戦ひ考へて、政府を作り、女を所有することを覚へた。そこで女は美人といふものに化けて戦争や三角関係を起し、あるひは山の神になつて復讐を遂げるのである」

この文の大部分は記憶に残らず、最初のところだけ永く支配される。何かにつけて「生物学的に言えば男は女の部分品なんだ」といろいろな人にいつてきた。これはわたしの得意のせりふのひとつになっていた。生物学の専門家となったわが息子にもこのせりふをいい、彼を納得させたものだ。その原典がここにあったことを知って「お前だったのか、こんなところに潜んで永いこと俺を支配してきたのは」という感慨をもった。そして文の全体を読んでこれはこれで面白かった。いかにも大岡昇平らしい強引な論法と明快な表現が読み取れる。この論の正否はともかく

、こうした諧謔とも取れる論の展開は、読んでいて心地よく感じられることは確かだ。

「自己の変質を自覚したジードは『要は癒えることではなく、病とともに生きることだ』という十八世紀の僧侶の言葉を援用している」

この観念もその後の人生に多大な影響を残したものだ。病気を治すことより病気とともに生きることだ、という言葉に勇気付けられてその後の人生を生きてきたといっても過言ではない。そのくらいこの言葉に影響を受け、また救いになってきたのだ。すなわち以前からあった心の変調がますますひどくなり、二三歳のときに日常生活に支障をきたすに及んで、一年間の療養生活をしなければならなかった。この病が癒えて退院したのではなく、一時帰宅を許されて自宅に戻り、そのまま病院に戻らなかった。心の変調に完治はありえず、如何にそれをなだめつつうまく付き合っただけでゆかかにかかっていた。薬もその際の武器ではあったが、心のもち方が重要なキーとなる。このとき『病とともに生きよう。治るなんて思うな』といいきかせてきたのである。心のコントロールという難題をいつも抱えながら生きてゆく上で、この言葉は大きな味方になってくれた。その情報の原点をここに見出して、この書は自分にとって普通の書ではなかったことに気付いた。

大岡は俘虜生活のあり余る暇に任せて、米兵から借りた英文の探偵小説を読み漁った。その感想を次のように書く。

「ここに費やされる作者と読者の知的エネルギーを惜しく思った。殊に作者が、豊かな文才や人生観察を傾けて、ただ虚偽に真実の仮面を着せ、読者に一杯食はせるのに汲々としてゐるさまを馬鹿らしく思った。探偵小説を読む奴も馬鹿だが、書く奴はなほ馬鹿である」

この強引な筆法も正否は別にして、すこぶる痛快でならなかった。わたしはこの影響を受けたわけではないが、これまでの人生でまったくといっていいほど探偵小説とは無縁だった。「馬鹿」と斬って捨てたところに、爽快さがこみ上げてくるのである。

「フロイディズムとは私の理解するところでは、淫蕩的ウインの少し気の変な精神病医が考へ出した臆説であつて、不確かな仮説の上に立ち、流行は専ら前大戦後の一般的性的退廃の結果たるものであつた」

フロイドといえば、これほど多くの影響をもたらした心理学者はいないかもしれない。それを「淫蕩的で気の変な精神科医」と決め付けたところは、同じように快哉を叫びたくなるほど共感してしまう。権威あるものをここまで叩きつけるのを、傍から眺めているのは愉快である。普通の文学者なら、もう少し斟酌するし、気取ってオブラートをかぶせるであろう。

大岡がこのように極端な論調に突っ込み、およそ穏やかとは程遠いところに行きがちなのは、やはり囚われの身であったことが影響していると思う。それと命の瀬戸際を潜り抜けてきたという経験が大きい。こうなると虚飾を取り去って何でも見えたであろうし、怖いものがない、何も遠慮することがないという立場を得ていたと思われる。単刀直入に一挙にももの核心に迫ってしまうという態度も同じである。

この大岡の文学にすっかり嵌ってしまった裏には、このわたしの似たような境遇があった。大岡昇平の「俘虜シリーズ」に耽溺したのは二一歳から二五歳くらいにかけてだったが、二三歳のとき一年間精神病院に収容されていた。窓には鉄格子がはまり、ドアには厳重な鍵がかけられていて、その中にいつまで続くか判らない囚われの生活を大勢の人々と過ごしているという環

境に、俘虜収容所の環境と共通するものがあつた。病院内では患者たちが竹などで作った麻雀牌があり、それで遊んでいたことなど、俘虜収容所と同じであつた。さらに命の瀬戸際にも居た。心の変調は命の危険と関係ないではないかと一般に思われがちであろう。しかしわたしの経験では、この状態はじつは命の危険が大いにある。しばしば自殺に結びつくという事実を見ても、ある程度説得できるかもしれない。典型的な症状である《不眠》と《食欲不振》が体力を奪って行って、状態をより悪化させてゆくなかで、当人には命の瀬戸際に立っているという自覚が常にあるのである。仲良くしていた患者があるとき、トイレの中で首を吊って自殺しているのが発見され、大きな声で知らせているとき、たまたま近くに居たわたしが彼を抱き下ろしたことがあつた。

よって本書に共感とともに深読みしていった状況があつたと思う。当時からその後にかけて、同じように深読みした書に「夜と霧」「死の家の記録」「アーロン収容所」がある。これらにも大いに啓発され、大きな影響を受けたというより、これらの本から得たものによって命を救われたという実感がある。ごく最近「アンネの日記」を読んで、ふるえるほどの感動を味わつた。これは「夜と霧」と対を成すものだと思へた。やはりこうした非日常の中の人間模様には、ただならぬ真実が浮かび上がり、それが感動を呼ぶのではないかと思う。わたしの心の変調がそれを倍化させているといえる。

心の変調とは、普通の人より心の振幅が大きく、その揺れる位置が普通の人を外側にずれる傾向にある、といったら少し理解されるであろうか。感受性、感覚、情緒といった言葉で「心」の中身の一部は伝えられるか。知性、理性、知覚をつかさどる「精神」とは区別されなければならない。よって「精神病」といういい方は間違いである。精神はひとまず正常である。病んでいるのはあくまでも心だ。しかも病んでいるのではない。ある状態に陥っているのであって、病んでいるといい切れるものでもない。

俘虜収容所で多くの人間を観察し、それを描写する目はシニクであると同時に、鋭い真実を見つめており、暖かさも見られる。下士官のように特権をもった者は必ず墮落すると断じつつ、そうでもない人物も居たことを記録している。

「まず私を驚かせたのは彼の裡に日本の下士官特有の傲慢と狡猾の片鱗だにもないことであつた。（中略）上級者は俘虜となつても何処か、思ひ上がった調子を残してゐることを知つた。この東北の農民には軍隊内の昇進に伴ふ特権によつて少しも毒されない一種の天才があつた」

こういう人物にわたしも出会つたことがある。悪気というものがまったくなくないという人物、これはやはり天才というほかない。

またこんなケースも紹介している。三十歳を過ぎた元神風特攻隊員が病棟の棟長であつた。それが改組される時、大岡たちを推薦して自分は一俘虜として作業に従事するようになった。しだいに株を上げていった大岡たちは「時々一般俘虜の間にこの恩人を見舞つたが、次第に何となくぎごちないもの」となり、「だんだん彼の眼から光が消へ、我々に対する態度に何か卑屈なものが窺へるやうになつた。俘虜にあつても『地位』といふものの結果は同じであつた。恐らく我々の側にも知らず識らず彼を傷つけるやうな態度があつたのである」

特権をあっさり譲って自ら進んで平の位置を選んだ元神風特攻隊員は、十分昂然としていてい

いはずである。しかしそうはならなかったという、これは貴重な報告であろう。社会人としての地位の上下には、いつもこの問題が潜んでいる。

女に関しても大岡一流の観察と表現を見ることができる。俘虜の演芸会に女形として出演する男が、女装して楽屋入りするところを見て、女そのものに成りきっているの、自分の眼を疑ったという。

「以来私は我々が普段見てゐる女とは、実は女でも何でもないのではないかと疑っている。ただ男の通念に従つて女らしく化粧した人形にすぎないのではないか。（中略）女とはまず手を取り、胸に触れ、それから接吻でもなんでも、諸君の好むところを、行へれば行ふべきものであつて、我々の網膜に投影される女の映像など、女自体とは何の関係もないのではないだらうか。一目惚れとか、恋人の顔の美とか、その他彼女の顔面筋肉の活躍によつて、我々が彼女の裡に想像する、様々の精神の諸作用など、すべて我々の眼の迷ひなのではないだらうか」

これは確かにその通りかもしれない。そのように見ることも必要であろう。しかし男は基本的にロマンチストである以上、ここまで割り切ってしまうと、また間違いの元になるような気もする。女に幻想を膨らませて夢中になる男が居るいっぽうで、女に何の関心もないように装うのも欺瞞である。女という存在に対しては、溺れてもいけないし、避けていてもいけない。最も重要な課題のひとつとして対処すべきであろう。

多くの文学者が軍隊を「悪」として伝えてきた。それはもちろん文学者に限らない。ところが大岡昇平はそうは見えていない。旧軍隊の悪いところばかり恨みをこめていいふらすのは、間違いだと書いている。その一員であつた以上、悪くいう自分にも反省があつてしかるべきだと突き放している。一兵卒として前線に送られ、命を落としかけて、かろうじて復員してきたインテリの見方として、これは奇観の部類に入りそうだが、何となく拍手を送りたい気持ちもある。

原爆で死ぬのも身から出た錆、という発言もこの考え方と軌を一にするものようだ。その死に方が如何に凄惨でも、それは観者の眼の感傷に過ぎず、戦争の悲惨は人間が不本意ながら死なねばならないという一事に尽き、その死に方は問題ではない、という。

「しかもその人間は多く戦時或ひは国家が戦争準備中、喜んで恩恵を受けてゐたものであり、正しくいへば、すべて身から出た錆なのである」

このことは広島市民とても同じで、身から出た錆で死ぬのだから、同情できないという。この理屈はどう解釈したらいいか、多くの反発を買うのは必至とは思ふが、ただ一概に否定できないところがある。この書を深読みした二十代のころ、そして再び読んだ今回でも、この辺の受け止め方に戸惑いを感じた。しかし読み終えてから考えているうちに気付いた。

この大岡の提起した問題は、今こそ真摯に受け止めるべきときではないか、と。戦争によって酷い目にあつて、自分は被害者だとばかりいい立てるのは間違いではないか。敗戦になったとたん、この戦争が負けるのは分かっていた、勝てるわけないではないかと多くの人がいい出した。被害者にさせられたのは時代が悪い、社会が悪い、指導者が悪い、とすべてひとの所為にして一切自分の責任を考えないという姿勢こそが、じつは問題なのであつて、こうした衆愚が同じ轍を踏む要素になると警告しているのではないかと気付いたのである。遠くから戦争の足音が聞こえて来つつある昨今、大岡の提起した示唆を厳しく受け止めるべきではないかと思う。

その後の大岡について、ネットで調べてみて興味深かった点が二つあった。そのひとつは「ケンカ大岡」と呼ばれ、文壇有数の論争家になったこと。いかにももつともなことだと納得できる。やたらと物議をかもしたらしいから、当然だろうと思う。

もうひとつが女の問題だ。坂本睦子を八年あまり愛人として、その間妻の自殺未遂騒ぎを何度か起こした。睦子と別れた後、その翌年睦子は自殺した。この情報も大いに面白いが、大岡ならではの感が深い。

七九歳で死ぬまで、多方面に旺盛な好奇心を示し続けた。ゴルフ、漫画、ロック、ポップス、映画、演劇等々。そういえばラジオで語っていた彼の肉声を思い出した。

「ゴルフも散々やったけれど、近頃ピアノに夢中なんだ。恥ずかしいけれどね」

このはにかんだようないい方のなかに、妙に人懐こいところがあった。声に張りがあり、発音は明瞭であった。そしてその数年後に、

「ピアノは弾いていないんだ。肩が痛くてね」

と語るその声はやや弱く、やさしさがあつた。

(完)

詩人北岡善寿氏の随筆「万年床周辺」を読んで、広津和郎の『あの時代—芥川龍之介と宇野浩二』を読みたいと思った。そこで図書館に行って、筑摩書房が刊行した『現代日本文学大系』の中の第四十六巻『宇野浩二・広津和郎集』を借りてきた。この本は昭和四十年代に刊行されたもので、昔懐かしい感じがした。本屋にこんな大きな全集ものが並んでいた頃は、戦後の文学の全盛期で、本が輝いて見えた。そんな時代に戻ったような感慨をもちつつ、この大部の本に少し押されながら読み始めた。

広津和郎といえば、例の『松川裁判』を真剣に読み、部分的には何度も読み返したものだ。しかしそれ以外の作品は読んだことがなかった。なんとあれから約五十年ぶりに広津作品を読むことになった。そして改めてこんなにすごい作家だったのかと驚きつつ、そのいくつかは本当に感激した。

『あの時代—芥川龍之介と宇野浩二』は、宇野浩二が心の闇に彷徨い、精神病院に入院するときのことを、詳細に書いていて、大いに参考になった。参考になったというのは、自分が精神病院に入院するときのことと較べながら読んでいろいろ考えることが出来たからである。そのときの芥川龍之介にも、冷静な観察がなされていて得がたいものだと思った。自殺寸前の芥川の悲しい姿が描写されている。宇野が入院を納得しなげなかなかに入院しないのを、なんとか説得して連れてゆくという困難な役割を広津が全力でやっており、それは本当の友人でなければ出来ないことだ。宇野は恵まれた男だと思った。

芥川は自分の母が、自分を産んですぐに狂死したことを終生重荷に感じていた。宇野が狂気を発し、いよいよ入院するという状況となると、芥川はその場に行かずにいられなかったようだ。そして自分が何時そのようになっても不思議でないと思い、その可能性が近付いていることを意識して、深く絶望したらしい。その直後の自殺は、そのこととの関係抜きには語れないだろう。ぽつきりと折れてしまうような弱さが芥川にはあった。狂ってしまったほうがかえって強くて、そうなることを恐れているほうが弱いのであろうか。

「宇野の神経は狂うことはあっても決してフィーブルではない。太くも逞しくもないけれども、蔓草のような強靱さを持っている」

この広津の観察は、的確であるとともに、友情をも感じさせる。なかで面白いと思ったのは、北岡氏も指摘しているところだけれど、次のところだ。広津が、宇野に「君が単なる神経衰弱という程度ではなく、マニイになりはしないかと心配している」ということを遠慮しながら言うと、宇野は答えた。

「『今だつてマニイだよ。立派なマニイだよ』と断言するやうににこにこ笑いながら云つた。『無論マニイさ。みんなは遠慮して云はないが、僕にはよく解つてゐるんだ。...併しね、僕は医者達に頼みたいんだよ。このマニイをすつかり治してくれては困るつてね。余り治されたら、小説が書けなくなつてしまふからね』」

本人からすると、この病気を治されて普通の現実にはぶつかると、その味気なさに耐えられないということがある。よく知っているうつ病患者も同じことを言っていた。心の闇には長年付き合ってきたわたしの場合でも、思い当たるところがある。見えないものが見える、聞えないものが聞える、渦巻く幻想・幻覚の世界、これはたしかに捨てがたい。「天然の人」から、すっかり「人間商売」に戻ってしまったら、この現実の味気なさは耐え難い。

宇野浩二は玄人筋の女性との関係が多く、死ぬまでプラトニックな逢引を欠かすことがなかったという。この生き方にある種の憧憬とともに、もって手本としたい気持ちもある。

巻末に『ある時代の広津和郎氏』というエッセイがあって、筆者は保高德蔵という作家である。昭和の初期、「円本」が空前の売り上げを出して、出版業界は大いに賑わった。出版社の利益は巨大なもので、円本元祖の建設社が『本邦文学全集』によって百五十万円の利益を上げ、それを模倣した日文堂が『近代文芸全集』によって七十万円、欧文堂が『翻訳小説全集』によって二百五十万円という利益を上げた。作家たちも人によっては数万円の印税を得て、出版界全体がお祭り騒ぎになった。そんな中で、出版社や著述家を観察し、詳細な数字の計算の下に、大局から正義の観念に燃えていたのが、ほかならぬ広津和郎であった。莫大な利益を上げているいっぽう、著述家にはわずかの報酬しか与えない出版社の搾取の実態に、広津は怒った。

友人の谷崎精二は気が弱く、原稿一枚に付き一円で売るということに、そんなバカな話はない、印税にしろと説得した。それではと出版社は一枚三円で買い取ると言ってきた。それでも印税にしろと言うと、それでは出版社に済まないような気がする、と答えた。

「おお、ここにも文人氣質の残滓が残っている、そんな、何人のためでもない、自分自身のための気休めにしかすぎないちっぽけな良心のために、目前に横たわる実際の計算を忘れてしまうから、著述家は出版社に搾取されるのだ、自分を顧みて済まないなんて気を起こす前に、この仕事はこれだけの利益があるから、それに相当した報酬をくれということを何故云うだけに頭が働かないのだ」

と広津は思った。「自分自身のための気休めにしか過ぎないちっぽけな良心のために」とは鋭い指摘ではないか。多くの人に反省を強いてくる言葉だと思う。

出版社が原稿を買い取りにってしまうと、その後幾ら儲かっても著者にはまったくリターンしない。そのもっともひどい例が、「ゾラの『女優ナナ』の翻訳者谷中弘氏で、彼は数年前この翻訳を一枚三十銭で欧文堂に売り、欧文堂はその出版が当たって三十万部を売り尽くし、一躍社運を隆盛ならしめたのに、買取の原稿であるからという理由で、著者は少しも顧みられなかった」のである。しかもその後翻訳小説集にこの一篇が出ているけれど、著者は何等の報酬も受けていない。

「日本の執筆者の、清貧に甘んじるといふ文人氣質が、出版業者を肥るだけ肥らせ自分たちを痩せさせたのだ」

と広津は慨嘆し、看過できる問題ではないと、行動を起こす。翻訳家全部を説いて回って、欧文堂に印税五分を支払わせるべく交渉しようとした。結束して要求すれば欧文堂は受け入れるほかにはないはずなのに、そんなことをして欧文堂を怒らせたなら仕事がなくなってしまう、と心配する者が多い。なかには友人の某よりもボクのほうが印税が一分多いからと優越感を持っている鼻持

ちならないものも居た。これでは駄目だと匙を投げてしまった。その後文芸家協会の総会でも、欧文堂とのことでやり合っ、席を蹴って帰るということもあった。

「全然考えても見ようとすらない男がいるかと思えば、こんな問題には最も敏感なるべき筈の、プロレタリア作家の鎌田有俊でさえ、そんな不当な要求をして欧文堂が相手にするでしょうかなんて云ってるんだよ」

と銀座で会った保高に言った。さらに続けて次のように言った。

「本当は分かるまで説明すべきで、いい加減の所で投げ出すなんて、僕自身もインテリの弱みをたっぷり持っている男だ、考えただけで実行に移す意力がないのは、結局考えない人間と同じことだと思って、憂鬱になって歩いていたのだ」

保高はこの姿勢にすっかり惚れ込み、心から尊敬した。その後広津は自分で出版社を起こすという構想を持ち、それを実行する。しかしこれは失敗に終わった。それにしても、この行動力と強い信念と正義感、これは戦後に松川裁判で見せたものと軌を一にしており、面目躍如たるものがある。

広津がこのような金銭感覚をもっていたことに、改めて驚きと敬意をもった。ともすれば清貧思想にとらわれて、カネのことを無視しようとする姿勢に、いつも疑問をもってきただけに大いに共感した。このことは日本人一般に言えることであって、このようにはっきりとした意思をもっている人は今でも少ない。数年前に、ある本で読んだ。西條八十が作詞に対するレコード会社のあまりに少ない報酬に腹を立て、

「こういうときにじきに清貧などと言い出すが、世の中に清らかな貧乏などない。貧乏はみなこの上なく汚いものだ。清貧などという言葉は、資本家が芸術家を搾取するために考えた言葉だ」

と喝破したという。なんと力強いことばだろう。

『真実は訴える』は、広津が松川事件の裁判のことを書いたものである。まだ二審の裁判が進行中で、宇野とともに仙台の高等裁判所へ足を運んだりしていた頃の作である。その二審判決後にあの長大な『松川裁判』が書かれる。広津が松川事件に深くかかわるようになるきっかけは、『真実は壁を通して』という小冊子を被告から送られて、それを読んだとき「嘘でこんな文章が書けるものではない」と語ったというあたりから始まった。宇野浩二も同じ感想をもち、二人でこのことをいつも話し合ったという。宇野浩二は『世にも不思議な物語』を書き、そして広津が『真実は訴える』を書いた。仙台高裁へ裁判を傍聴しに行ったとき、被告たちの目が澄んでいるから、彼らは無実だと言ったことも、大きな話題になった。

このことが、「甘いのではないか」という批判をよんだ。批判だけならいいが「文士の裁判」「ペーパー・トライヤル」などと揶揄するような声も出てきた。読売新聞に三好十郎が「愚者の楽園」という一文を書いて、その中で「四十年間この人生に肉薄する事を事業としてきたリアリズム作家にしては甘過ぎると思ふ」と述べた。

これに対して広津が「甘さと辛さ」という一文で、答えた。こういう反論の文になると、広津和郎は力強さと説得力のある文に、一段と迫力が加わる。

「しかし、私に云はせると、日本の文壇人は少し『甘さ』を恐がり過ぎてゐるやうである。『甘く見られる』といふ事を致命傷のごとく思ひ、甘く見られまいと躍起になつてゐるかのごとく見える。そして人の甘さを指摘したがる。それだから私の文章から『甘さ』を見つけたといつて、文章の全体よりもそこだけ特に際立たせて取り上げたりするのである。

そんなに『甘さ』を恐れて、さてどんな『辛さ』をつかんでゐるといふのか。その『甘く見られる』といふことに戦々競々としてゐるその姿こそ、私にはかへつてアまく見える」

この一文をことさら興味深く、またある種の感慨をもって讀んだ。というのはわたしが大学二年のとき、大学での広津和郎氏の講演で、結び近くに「彼らこそ甘いのではないか」と述べた。その一言が深い印象を与え、わたしは松川事件の只中に飛び込んで行くことになった。昼間は大学で学び、夜はナイトクラブで午前三時までボーイとして働き、その間に松川裁判の被告たちとともに、その無罪判決を得んがために奔走した。その無理が祟つて、一年間も精神病院に入院するという結果につながつていった。そのきっかけともなった「甘い」発言に久しぶりに接して、懐かしくも感慨深かった。

あのときの宇野浩二と広津和郎の起こした言論によって「松川裁判」は大きく動いていった。思えばこの二人によって、このわたしは大きな波に飲み込まれ、運命が狂つて行つたのだ。少なくともそのきっかけとなった。その文にここでお目にかかったのだ。思ひは複雑であるとともに、ある爽快感もある。この自分も甘さをもっていたのだろう。その甘さゆえにあそこまで全身で、運動に身を投じたのだ。それは広津氏の呼びかけに応えた、と思う。青春時代の燃えるような日々が、感慨深く思い起こされた。それは心地よい感慨でもあるし、これでよかつたのだという満足感をもち、誇りに似たものまで湧いてきた。

(完)

銀座に行って、とある画廊に立ち寄った。その画廊のオーナーH氏とは知り合って日が浅かったが、すぐに応接間に通されて、話し始めたら止まらなくなった。妙に波長が合って、興味尽きない話が次々と続くのだった。

いろいろあった中で、次の話はとくに興味深かった。

H氏が大阪の梅田画廊で見習い修業をしていた頃の話である。梅原龍三郎の油彩画をデパートを通じてある大物に売った。それを小林和作がニセモノだと断定したので大問題となった。デパートと梅田画廊は窮地に陥り、すべて返金して油彩画を引き取ろうという話になった。小林和作はH氏に手紙を寄越し「あれが本物なら二百万円あげる」と書いてあった。しかし最後の手段として、梅原のところに持ち込んで判定してもらうことになった。

鎌倉の自邸にH氏を迎えた梅原は「これは間違いなく自分が描いたもの」と自信をもって言いきった。そこでこれまでのいきさつを説明すると「それではわたしが電話してあげよう」と、その場で小林に電話した。すると小林が答えた。

「梅原さん、あんたも毫碌したものだ。自分の絵も判らなくなるなんて」

これには梅原も二の句が告げなかった。小林の頑固さに敵う者は誰もいなかった。小林和作は尾道の人で、関西地区では今なお信奉者が多い。梅田画廊が火事に遭ったとき、小林は二千万円持ってきた。とてもそんな大金は受け取れませんと断ると、「お宅との関係はこのくらいのものなのだ」と強引に置いていってしまった。それから毎年その時季になると挨拶に行くようになった。社長を乗せてゆく車の運転手に皆がなりたがった。なぜなら、運転手に五万円包んでくれるのが慣わしだったから。

われわれの日常感覚からは遠い内容かもしれないが、話としてはなかなか面白い。小林の大物ぶりと頑固さ、梅原の人の好きと間抜けさ、この組合せがなんとも可笑しい。この両者はともに一八八八年の生まれで、若いころからの仲間である。梅原は「自分が描いた絵だ」と断定したが、これで間違いのないと言い切れるか、疑問が残らないでもない。何故なら、梅原はいろいろ鑑定しているが、まず梅原の鑑定があつたら画商は信用しないというのが常識になっているからだ。梅原は自分がいいと思ったら本物としてしまう。真贋という見地はまったく度外視していた。実作者というのは、自分が描けないものだとして特別いいように見えてしまうものだ。

とはいうけれど、自分の描いたものかどうかを間違ふことがあるのだろうか。ジョルジョ・デ・キリコという彫刻家にして画家が居た。あるとき真贋問題が持ち上がったとき、作者であるデ・キリコに鑑定させると「これは自分の作品ではない」といった。これに怒った画商が裁判に訴えた。この裁判でなんとデ・キリコが敗訴となって、本物とされたのである。実作者というものは、鑑定となると自分のものも見分けがつかなくなることもある、という実例である。ちなみにデ・キリコも一八八八年生まれ、梅原、小林と同じ年である。これはドラマティックな例だが、ほかにもいくつもある。というわけでニセモノと断定して譲らなかつた小林和作の判定が間違いだ、とは言い切れない。この一件は、真筆ということで落着しているが。

梅原の鑑定で実際にこんなことに出会ったことがある。

銀座で行われたオークションの下見会に行ったときのことで、カタログを見たときから疑問に思っていたものがあった。それは作者不詳でありながら、落札予想価格五〇万円となっていたものがあった。しかもそれはコンテで描いた簡単に見える図柄だった。

会場に行って傍に近寄って観たら、最上等の額に収まり、プレートに「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ」とあって、左下にはサインもあった。題名は「靴屋」。靴職人が室内で仕事に励んでいる姿を描いている。大きさは五四センチかける四三センチで、やや大きめだった。この作品の箱には梅原龍三郎と富永惣一の鑑題がついている。

「しかし」とオークションの係員はいう「鑑題箱はあっても、鑑定書があるわけではありません。真筆という確信が得られないので、作者不詳としておきました。作者不詳の場合、いくら高くても十五万円が限度なのですが、そうするとこれを贋作として出したということになってしまうので、五〇万円としてみたわけです」

オークション・ハウスとしては妥当な対応といえるかもしれない。さてその作品を観ると「ゴッホかな？」という感じはある。これが真筆なら二千万円以上するはず、はたしてどうか。人々はどう判断するのだろうか。

帰宅後、ゴッホが鉛筆、コンテ、ペンをつかって描いた作品ばかり集めた画集を開けてみた。ゆっくり端から端まで観て行って、この作品は贋作という確信をもった。

その理由はまず描き方が雑に過ぎる。ゴッホは一見熱情に任せて雑に描いているように思われがちだが、じっさいはあくまでも冷静にして、緻密・繊細である。こうしたデッサン画においても、驚くほどの集中力で隅々まで丁寧に描いている。

人物、特に労働している人物を描いたとき、その描写には動きがあり、表情がある。しかしこの作品はバランスが失われており、頭から肩をとおって手先にいたる体の線に流れがない。とりわけゴッホは手の描写に優れており、仕事をする手を描いたとき生き生きとした動きがある。しかしこの作品にはそれがなければ、手の基本的な描写が稚拙である。

もっともいけないのは、部屋の中の床と天井の線の処理である。ゴッホが影を描くときの線は、すこぶる几帳面に真っ直ぐな線を等間隔で何本も引いている。それが線と線の間隔が不揃いであるばかりか、線と線が交差していたり、線の太さが一定していない。ほとんどナグリガキといっていいほどの荒っぽさなのだ。

この絵のオークションの結果は、一四五万円の落札で終わった。誰が競り落としたのかは知らねども、なんとも微妙な価格がついたものだ。競り落とした人が画商だったら、梅原の鑑題箱がついていればそれなりの客に当てはめることができる、と思って買っていったのかもしれない。いずれにしろ梅原の名前があるばかりに、誰かがとんだニセモノを掴まされていることになる。

その後オークションの係員はいった。

「あれに梅原さんの名前がなかったら、展示しませんでした」

つまりオークション・ハウスでは贋作とみていたのだ。素人のわたしにも贋作と判る程度のものであった。この世界にはこんなことも多い。ばかりではない、ニセモノなくしては骨董商という商売は成り立たないという面も否定できない。自分の眼で観ずに名前だけで判断する人が後を絶たな

い以上、贋作はなくなる。梅原とか、ゴッホとか、印象派の画家ばかりに人気が集中するという画一的傾向がそれに拍車をかけている。都心に構える一流のオークションでは、贋作は扱わないのが建前となっている。よってこの作品はあくまでも「作者不詳」として扱っていた。

(完)

ストラディヴァリウス、アマーティ、グアルネリウスなど、十七、八世紀北イタリアのクレモナを中心として栄えたヴァイオリンの名工たちが残した逸品は、今にその永遠の輝きを伝え、音楽界に君臨して他の追随を許さない。科学万能の現代でも、その神秘を解き明かせないのは何故だろうか。その材質、色合い、寸法等あらゆる面から計算し、寸分違わぬものを作るべく、既に世界中で幾度となく試みられている。しかしそれらはいずれも徒労であった。同じ音色にならないのである。これは人類永遠の謎であろうか。

ここにその神秘を伝える面白い逸話がある。――その頃、クレモナの近在に深遠な森が横たわり、その中にひとつの泉が滾々と湧いていた。その泉のほとりには、樹齢何百年というエゾ松（スプルス）の巨木が生い茂り、夏になると清冽なる泉と、南国の太陽の光に、その生命は天にも昇るばかりに謳歌する。そして夏の終わりに、そのエゾ松に雷が落ちて、幹が割け、その一瞬、エゾ松の生命は泉に落ちて冷やされる。そのもっとも質のいい部分から、あの名器は作られた。だから、クレモナの名器には、永遠の生命の神秘が宿っている。――というのである。

あのクレモナ・ヴァイオリンの、深くも甘い音色にふさわしい、ロマンあふれる逸話ではあるまいか。と同時に、理屈にも適った話である。樹木から木材を取るときに鋸で挽いて取るのが普通であろう。しかし材として最もいいのは、割り材なのである。筋が通って最も強い材になるには、雷によって割られたものが特別に上等である。そして生木はそのままでは使えず、樹液をきれいに抜き取らねばならない。木の乾燥といっても生木を天日に当てたら、たちまちひびだらけになってしまう。皮をむいて水に浸けると、丸太はほとんど水中に没し、時が経つとじだいに水に浮いてきて、丸太の三分の一くらい水上に姿を現すと、樹液はすっかり抜けている。これを引き上げて乾かすと最高の材となる。この条件にぴったり合っている。この辺がこの話の面白いところだと感心する。

ヴァイオリンの表板はエゾ松を材とした響板、それを支える裏板と横板はイタヤカエデが使われている。エゾ松は針葉樹なので木のエイジングが進行して、二百五十年ほどで硬さがピークに達する。それから徐々に後退して行って、その六百年後には伐採されたときとほぼ同じ硬さに戻る。それから先は木の繊維が崩れ、寿命の終わりに向かって劣化してゆくばかりとなる。よってクレモナ・ヴァイオリンはピークを過ぎつつあり、その渋く深い音色がまた一段と貴重なものとなっている。この状態はまだ数百年続き、劣化し始めるのは五百年後くらいになるといわれている。

数多く輩出したクレモナ・ヴァイオリンの名工の中で、群を抜いてトップの位置に立っているのは、アントニウス・ストラディヴァリ（一六四四～一七三八）である。九十四歳まで生き、千百十六挺のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、ギター、マンドリンを制作した。うち約六百挺が現存している。ストラディヴァリは大変な働き者で、最晩年にも三挺作っている。最盛期には、月二挺位作っており、これは驚異的スピードである。

ごく狭い会場で百人位の聴衆を前に、天満敦子がストラディヴァリウスを奏でた。その音色の

すごさに言葉もなく圧倒された。あんな神秘的な響きが聴けるというのは、まさに奇跡的だとさえ思った。

音の違いは周波数分布にある。そこでストラディヴァリウスと鈴木ヴァイオリンの周波数分布を調べたところ、興味深い結果が出たことが報告されている。鈴木ヴァイオリンは、周波数特性がフラットである。つまり満遍なくすべての音が同じ強さで出ているのに対し、ストラディヴァリウスは大きくばらついていたのである。とくに目立ったのは三千ヘルツ付近の周波数が極端に出ていない。ほとんど剥奪されているとっていいほど出ていなかったのだ。三千ヘルツの音というのは、ガラスを爪で引っかいたときに出る「キーツ」という不快極まりない音に近い。この音が出ていないからあの心地よい音色になる、という説明は納得できるものがある。しかしどうしたらその不快音が出ないように作れるのか、そこが大問題だ。

ストラディヴァリの没後すぐ、一七四五年にクレモナの伝統工芸はあっさりとして途切れてしまった。それを復活しようという動きはようやく二十世紀後半になって実現した。クレモナに再びヴァイオリン制作の工房が集中的に生まれたのである。そこからどのような名器が今後生まれてくるのか、いまだ誰にも判らない。しかしクレモナというブランドは生きており、この名を聞いただけで注目されるので、この地にヴァイオリン工房をもつ者が増えつつあり、日本からも数人が参加している。

二十世紀のころはストラディヴァリウスの値段は家一軒の値段、つまり数千万円で入手できた。ところが二十一世紀にはいると二億円になり、二〇〇六年のオークションで四億円、二〇一二年には十二億円まで跳ね上がり、まさに天井知らずの様相を呈してきた。

ストラディヴァリウスなどのヴァイオリンの名器の価格が今後いくら高騰しても、ピアノの名器より安いという見方がある。シュタインウェー、ベーゼンドルファーなどのフルコンサートでも普通は一千万円で買える。折り紙つきの最高級品でも二千万円くらいである。しかしピアノは大量のピアノ線が響板を引っ張り続けているので、十年もするとその張りを失ってしまって、価格的にはゼロに近くなる。よってまったく弾かなくても、毎年百万円ずつ消えていることになる。しかしヴァイオリンは何十億円で買おうとも、売るときはもっと高騰している可能性が高い。

ヴァイオリンの弓毛は馬の尻尾が使われている。いっぽう弦は...現在ではスチール製（ナイロン製も）が一般的であるが、元はといえばガット、つまり羊の腸だった。羊の腸を馬の尻尾で擦って、あのヴァイオリンの音が奏でられている。そう聞くと、この楽器は遊牧民から生まれたのかなと想像され、素朴な音という印象を与えられる。それがこれほどに高い芸術の祭壇に祭り上げられてしまったのだ。この価格はどう考えても現実離れしていて、投機の世界にさらわれてしまったのかと嘆きたくなる。

(完)

二十年ほど前のこと、新宿「小田急ハルク」五階の「工芸サロン」での展覧会に、能面「萬媚（まんび）」を出品した。工芸サロンの入口を入ると、その正面のやや小高い壁面に掛けられ、サロンに入って来る人をじっと見詰める形になっていた。ある男が後に語ってくれた。「あの面に睨みすえられて、ぞっと寒気がした」と。

能面は視線をもっている。ただしそのように作ればの話で、単に眼の形に孔が開けられているだけの面も多くある。眼を切る角度、裏の繰り方などいろいろ工夫することによって、面自身が視線をもつ。優れた古面はみな視線をもつように作られている。「萬媚」は若い女面の中では、もっとも色気のある面なので、古来品が悪いとされてきた。シテ面として使われることはなく、悪女とか魔性の女といった役どころに使われてきた。それでも人気の高い面で、かつては中年男が秘かに愛蔵するものだった。しかし近年は女性に圧倒的な人気があり、はじめ若い女性に受けていたものが、その後年齢に関係なく女性全般に高い人気をもつようになってきた。現代女性たちは妖艶な魅力を尊しとするようになってきたのである。さらにエスカレートして「妖艶」という段階に満足せず、「淫靡」な面を作ってほしいという女性が次々と現れて、作者を慌てさせるに至った。まことに空恐ろしい世の中とはなったものだ。とはいえ男にとって得も言われざる好もしきこと、あらまほしきことになってきたともいえる。

ところがごく最近、面白い発見をする機会に恵まれた。妖艶そのものといった女が居て、男たちを魅了すること限りなく、幾多の関係をもってきた。いまや四十歳代半ばとなるが、その妖艶さはますます磨きがかかり、まともに見るのもまぶしいほどだ。その女がわたしの作った女面を観て、手に取ったりしてからやがていった。

「わたしはこの面がほんとうにいいわ。すごく魅かれる」

それは今まで誰もいいといった人がいない面だった。「増女（ぞうおんな）」とって、いかにも中世の女らしい冷たい面影にして、あまりに格調高い。よってこの面は「羽衣」の天女に使われる。まさに幽玄という言葉にふさわしい、能面の中の能面という面である。こういう冷たくて近寄り難い女面を好む人は、男女ともにこれまで会ったことがなかった。ここで気づいたことは、妖艶な「萬媚」に魅かれるのは、妖艶への憧れをもった女たちであって、自身が妖艶なヒトは、むしろ格調高い、如何にも中世的な冷たさに魅かれるということらしい。これは貴重な発見だった。

作家・長部日出雄が上京してすぐに、東銀座の「東劇バーレスクルーム」に入ったとき、当時人気絶頂だったジプシー・ローズの真っ白い裸身がライトに浮かび上がり、腰を扇情的に回し続けるグラインドで客席の男たちの視線を釘付けにした。長部はそのとき、ジプシー・ローズの眼に射すくめられて、全身鳥肌が立ったという。この瞬間をもつことができただけで「自分の青春には意味があった」と語っている。妖艶な女のヒトミから発せられるエネルギーには、得体の知れない魔性が秘められていて、その毒気に当てられるということは、男にとって冥利に尽きると

いえよう。

こんな経験は誰でもあると思うが、このわたしにもある。オペラ「カルメン」は歌舞伎なら「忠臣蔵」のようなもので、これほどお客を呼べる演し物はない。これまでカルメンで大当たりを取ってきた幾多の歌手たちが居た。これぞカルメンそのものともてはやされ、鳴り物入りで売り出された歌手も居た。しかしわたしにはどれもぴったりに来る歌手は居なかった。ところが一九七八年にウィーン国立歌劇場で上演された「カルメン」には魅了された。カルロス・クライバー指揮ウィーン国立歌劇場管弦楽団、合唱団、バレエ団、さらにはウィーン少年合唱団も出演するという豪華メンバー、演出がフランコ・ゼッフィレツリ、そしてドン・ホセにはテナーのプラシド・ドミンゴ、カルメン役に抜擢されたのはロシアのメゾ・ソプラノ歌手エレナ・オブラスツォワ、ともに三十歳代のバリバリだった。この伝説的な映像をビデオテープで、やがてDVDで再生すること二十回以上にも及んだ。このエレナ・オブラスツォワのカルメンには心底から魅了されてしまったのである。

やがて信じがたいことが起こった。ソ連が崩壊し、エレナ・オブラスツォワが日本に来て洗足学園で教えることになった。来日早々にリサイタルが開かれた。第一部ではロシアの古謡とか歌曲を歌い、七色の声をもつという歌唱力を堪能させた。第二部ではオペラのアリアを中心に有名曲を歌った。「カルメン」から「ハバネラ」「セギディーリア」の二曲を歌い、あのウィーン国立歌劇場での大舞台を再現してくれた。驚いたのはあの時とまったく変わらない演出で歌い、細部まで寸分違わないのだった。三〇歳代だったウィーンのとくと五〇歳代になったそのときでは、やや細めになり、美しさはむしろ増しているように見えた。ドン・ホセを誘惑する場面で歌う「セギディーリア」を歌ったときの恐ろしいばかりの迫力、そして一瞬視線を投げつけられたと見えたとき、ぞっとして背中に電気が走った。じかに見るプリマドンナの恐るべき魔力に全身が硬直してしまった。以前より凄みを増しているカルメンを目の当たりにできるなんて、なんと貴重この上ない体験だったことか。これだけでもこの人生に意味があったと、長部日出雄流にいいたいほどだ。

能面を作るとき「型」と呼ぶ紙で作ったものがあって、それで顔の輪郭とか真横から見た線、さらには眼・鼻・口とかを、ほぼ正確に彫り出すことが出来る。これは「切り型」ともいい、江戸時代には出来ていたらしく、秘伝として門外不出とされてきた。しかし最近ではあの手この手を駆使することによって「型」を入手することが出来るようになった。といっても「型」があれば能面として完成品が出来るといって、そうはいかない。それらしい形は出来るけれど、そこに表情を盛り込むにはいろいろな技術が必要になる。女の面でも、色気のある面、つめたい面、格調高い面等いろいろあるけれど、そうした表情を出すにはどうしたらいいか。突き詰めるところよく観察して彫りだす、これしかない。よく観察して、女性の顔のどこをどのように彫れば、色気のある顔とか、あたたかみのある顔とかになるのかを研究するほかない。よって電車に乗ったとき、前に腰掛けている女性の顔をひたすら観察し続けた。

こうしたとき女性は見られていることを意識して、こちらを見返すことになりがちである。ところがそうしたことは一切なかった。ひたすら見ているのは、顔の形なのだ。さらにいえば顔の形のなかの線を観察しているだけなので、キャラクターは関係ない。こちらの思いはゼロである

。こうしたときは何も相手に感じさせないということであろう。もっと言えば特殊な感情はないので、こちらの視線はエネルギーがゼロに近いのだろう。ところがあの女はいい女だなと思って見詰めると、たちまち見返されて思わず眼を逸らすことになる。相手に魅力を感じて観たときに、こちらの視線にある種のエネルギーが発するのである。とくに悩殺されている女を盗み見しようとするときが、もっとも大きなエネルギーを発しているに違いない。

われわれ人間の視野は一八〇度あるという。その視野の中には意識下の視野とそうでない視野があると、ものの本では教えている。路上を歩いていて、真下に穴が開いていたりすると、その一瞬それに気づいて立ち止まったりするのは、実は意識下の視野に入っていないけれど視野には入っているからだ。真横から何か飛んできたりすれば気がつくのも同じ原理である。横に一八〇度の視野をもっているのは男の場合であって、女はもっと広い視野をもっているとされる。ということはちょっと横を向いただけで、真後ろも見えていることになる。前に行く女の後姿に魅了されて見とれたりすると、いきなり振り向かれて狼狽することになるのもそうした構造によるらしい。あるいは背後に異常な熱気のようなものを感じて、無意識のうちに振り返ると、焼きつくような眼がじっと見詰めていたというようなことも起こる。

視線に力があるということなのだ。この視線の力を計算した報告もある。視線というのは電波であって、こちらが電波を送ってその送り返された電波を己が眼球で捉え、頭脳に送ってその化学変化によって結ばれた映像を認知しているというメカニズムである。視線という電波は送られた先の物質を少しずつ削り取る力をもっている。大勢の眼に触れられたものが古ぼけてくるのはそのためで、それだけ表面が削り取られているわけだ。反対に人の視線を浴びていないものは、何千年経っても昨日作られたように新しい。光もまた電波だから、物を削り取る。よって闇の中で誰の眼にも触れずに保管されてきたものは、真新しいままに残る。古代遺跡にそのようなものが時々出土する。

わが同胞たちは、視線を受け止める力が相対的に弱い。それだけ純真なのか、気が弱いのか、恥ずかしがりやなのか、その辺は不明だけれど、相手の視線を見返す力がすこぶる弱い。これは日本の文化であって、相手を傷付けまいとする日本人の「こころ」なのだ、といわれれば否定するつもりはない。しかし国際的には通用しないばかりか、不利になる。日本の総理が外国の首脳と会って、握手するまではいいとして、その後の会話になると視線を逸らしがちになる。相手がじっと見ているのに、視線が下を向いたままという情けない総理も居た。将棋の羽生名人は向かうところ敵なしのごとく勝ち続けているが、やはり視線は弱い。チェスの世界チャンピオンが来日して羽生名人と対談したとき、相手はまっすぐ顔を見ながら話しているのに、羽生名人は視線を下げてばかりいた。

社交ダンスのラテン種目は、相手と向き合ってお互い眼を見ながら踊ることになっている。ルンバとかチャチャチャとかサンバなどは、愛の踊りだから、じっと相手を見詰め合って踊ることになっている。しかしこれが出来る者はめったに居ない。まったく眼を合わせないのが普通である。視線はあらぬ方向を向き、こちらを向いていてもせいぜい胸の辺りか、頭のほうに行っている。しかしこちらの眼を見してくれる女性を三人知っている。一人はわたしより年配で、透き通

るような視線で見えてくれる。こちらの心が洗われるようだ。もう一人はやや若く、きわめて優しい目つきで見えてくれる。努力して見ていることはよく分かる。よってそれが終始というわけにはいかない。十秒くらい続くのがいいところであろう。ところがしつかと見て眼を離さないヒトと踊ったことが一度だけあった。その女性は上背があり、わたしと眼の高さがほぼ等しく、視線をまったく逸らすことがない。この眼は特に強いというのでもなく、優しいというのでもない。言葉にあらわしにくい印象的な瞳であった。このヒトとの踊りは、これまで経験したことのない格調高いものだった。あんなに高踏的な踊りは出来るものではないと思った。このヒトとは、また踊る機会もあると思えるので、楽しみにしている。

(完)

六月はまだ蟬の鳴く時季ではない。所によっては鳴くかも知れないが、私の来ている村では蟬らしい鳴き声は耳に届かない。代りに雨蛙の声が間近に聞こえる。草木の陰で鳴くのだ。昨日一昨日と晴天だったが、雨蛙は鳴いた。家を出て外を歩いている、あちこちで煩いほど鳴いていた。雨の到来を告げるから雨蛙と言うのだろうが、雲のほとんどない晴天でも、この小動物は晴朗な声で鳴き立てるのである。ところで、今日は朝から曇っていたから、私は傘を持って散歩に出た。雨蛙は鳴いていた。

私がいる村は海が近い。家から五六分も歩けば海辺へ行くことが出来る。私は昨日もそこへ行った。そこに雨蛙はいない。その代り、砂浜には昼顔がたくさん咲いているのである。名を知らぬ小さな花も幾種類もある。葉をちぎると異臭のするハマエンドウが昔と変わらず繁茂している。高さ一五センチほどの草木である。それより私が気にしているのは、海辺の匂いを含んだハマボウフウである。刺身のツマにする植物で、昔はいくらでも生えていて、村の子供たちはそれを家で飼っている兎の餌にしたものである。それが近年砂浜から姿を消した。近在に温泉地があるので、刺身のツマとして需要が増大したためである、と村の者から聞いたことがある。所謂、乱獲で消滅してしまったのであろうか。そう思いながら、私は昨日注意して探しているうちに、やっと二株見つけた。それでまた今日も、その絶滅寸前の姿を見に出かけて来たのである。勿論、それは昨日あった所に無事に生えていた。それで更に範囲を広げて探してみたが、一株も見つからなかった。

既に雨は降り出していたので、家に戻って部屋に落ち着くと、矢張り雨蛙の声が聞こえた。私はそれから持参している本を読んで時を過ごした。昼食後も本は読み続けた。外では雨垂れの音がしていた。そのうち気がついたのだが、雨蛙の声が聞こえない。時計を見ると三時である。本格的に雨が降り出したので、もう予告の意味はないから、彼らは鳴くのを止めたのか。蛙が鳴かないと、時間が停止してしまったような妙な気分になった。鳴く、鳴かないは蛙の勝手に、こちらが文句を言う筋合はない。が、毎年この時季に雨蛙は鳴いていたのか、という疑問が湧いた。年によって違うのかどうか。自然環境に関係するのか。今年は異常だぞ、と蛙は告げているのか。

すると私の考察は悪い方へと傾き始める。私は一昨々日とその翌日の二度、村から二キロばかり離れたところを流れる川へ自転車で行った。初めの日、鮎を釣るつもりで竿と他に必要な道具を持って行ったのだが、橋の上から流れを見下ろすと魚影がない。その川は昔から、稚魚を放流する漁業組合はないが、海から鮎の遡上しない年はなかった。私は毎年、六月でなくても旧盆を迎える八月には村に戻って来て、決まってその川で鮎釣りをする。投げ網をする者もあるが、それで魚がいなくなるということはない。それが今年はおかしいのである。

私は河口へ行って見た。するとそこに中年の男が一人いて、餌をつけては竿を振っている。川縁に釣った鮎を入れておく引舟を浮かべている。浮子をつけて釣っているのだが、見ていると、浮子が沈み竿を上げると穂先がしなる。取り上げてみると、掛かっているのは食用にもならぬ器

量の悪いドンコであった。竿を上げる度にドンコである。男は「解禁の日には鮎は釣れていたんだけどな」と言った。それなら橋の上から見て、魚が石についたアカを舐めた跡がある筈だし、魚がいれば平を打って腹が光る筈である。その形跡や影は少しもなかった。異変というしかあるまい。

私はその翌日、もう一度川へ出かけた。今度は竿も何も持たずに行った。川に架かる幾つかの橋の上から流れを眺めるためである。どの橋へ行っても、そこから見える流れの中に一匹の魚影も石の舐め跡も見つけることは出来なかった。どうやら鮎は少しも遡上していないのだ。そう結論するしかなかった。何故そうなのか。去年の産卵期に河口に異変でもあったのか。産卵していれば、それが孵化して海へ下り、翌年の春先には川を遡って行く筈である。海にいる間に、漁師に網で捕られてしまうこともあり得る。鮎の稚魚は海にいる間は鰯の子のシラスと見分けがつかない。しかし、この辺りではシラス漁の話は聞かない。ともあれ、どこから見ても鮎が一匹も見えないというのは不可解なことだ。遡上が遅れているのだろうか。普通遡上は川の水温が上がる四月である。六月にはそれが成長しているから、川の解禁が行われる。魚のいない川を解禁しても何の意味もあるまい。一日めは気づかなかったが、二日目に行った時、ある橋の袂に「投網全面禁止」の立て札が立っていた。川を管轄する町役場が立てたのである。役場は地方の行政機関であるが、鮎の動静までは目が届かぬらしい。現実離れした警告の立札を立てるなんて、滑稽の謗りは免れまい。

こんなことを考えていると、雨蛙の声が聞こえた。しかし、その声は直ぐ止んで、後が続かない。時計を見ると午後五時だった。

(了)

Mさん（レイクサイドつくば・茨城県つくば市）

三月二十一日、今日はMさんの命日だ。あれからもう一年経ってしまった。Mさんと出会ったのは二〇〇四年の秋。以来十余年親しくおつきあいをしていただいた。

僕が二十歳代のころ、七年半暮らした八千代市の極めて不便な団地にテニスクラブが発足し、数十人が活動した。仲間に入れてもらい、初めて硬式テニスなるものを楽しんだ。やがて僕自身通勤の利便のため松戸市に引っ越し、時々古巣のクラブに通うということに。

三十九歳。突然の不調（その十年後うつと判明）にみまわれ、仕事はじめほとんどのことが満足にできなくなり、テニスのほうも六年もの長い長いブランクが生じ、まあまあの体調の時に遊びに行くという関係になった。

毎年二回、クラブでは関東一円の各地で合宿をして親交を深めていたが、クラブ員が高齢化するといつしか年一度となり、合宿地も近場に求めるように。不定愁訴の固まりのような自分だったが、この合宿には参加したかった。牛久沼のほとりの荃崎の施設・レイクサイドつくば（当時はレイクサイド荃崎）を教えてくれたのは僕の家内の妹だったが、一度行ってみるとなかなか具合がよく以来定着した。その施設には、意外と知られていないが良質なかけ流し天然温泉「兆寿泉（ナトリウム-塩化物泉）」があり、眼下には牛久沼が眺められる。夕食が近づきコートから引き上げるころは西の空が広く赤く染まり美しい。小川芋銭、住井すゑさんらが愛した牛久沼。ここはアタリだった。

二度目に行った折、僕は翌日の昼食の場所を探す役を買って出て付近を走り回った。まだまだ気分障害が顕著で、仲間と同じようには物事ができない。ひとり歩きはかえってありがたかった。

牛久沼といえばウナギだが、やっとりリーズナブルな店に予約でき、大任を果たした感じで気分よくついでに牛久駅の方まで行ってみようと思ふと足を延ばす。やがて六号線沿いに大きく「アンティーク」と書かれた看板が目に入り、おやっと思ひフラリと入ってみることに。ちょっとほかにはない雰囲気のお店だった（以前はラーメン屋だったとか。あまり内装を変えていないので不思議な感じが漂っていたのだ）。当時は仕事の合間にアンプを作ったり、カメラの歴史を調べたりして嫌な症状を紛らわすことが多かったが、次第に古いカメラに興味が深まりアンティークショップやリサイクルショップは無視して通り過ぎることができなくなっていたのだ。

店に入るなり、巨大な黒いグラフィックス（アメリカ製・木製革張りの大型プレス用一眼レフ）が目に入りしばらく釘づけに。店主は机に座り何やらいじっている。聞けば「春にオープンしたばかりなんですよ」などと、フレンドリーになんでもニコニコ答えてくれる。押しつけがましいところはまったくない。話しているうちに次第に話もはずみ、なんともいえない好感を覚え時間の経つのを忘れた。ずいぶん油を売ってしまって慌てて宿舎に戻ったが、そのマイペースで気のいい店主がMさんだった。その後も自分の調子のいい時は気晴らしにたびたびお店を訪ねた。

Mさんはかつて半導体の工場を経営していたそうだ。自ら半導体を作る設備を開発し、中国にも長く指導に行ったりしていたらしい。

現役中に「潰瘍性大腸炎」というやっかいな病気になり会社を畳んだ。潰瘍性大腸炎に漢方薬の小柴胡湯（ショウサイコトウ）が効果があるというので、親しい北京大学の先生を通して生薬を送ってもらい使っていたそうだ。ところが、その生薬の副作用で「間質性肺炎」を発症した。調べてみると、やはり小柴胡湯の重要な副作用として間質性肺炎は明記されている。柴胡というセリの一種が原因らしい。

「オレが勝手に判断したのがいけなかったんだね」と語るMさん。

そんな事情があって、自宅から近い場所にお店を借り、現役中に好きで集めた骨董品を売ってのんびり暮らそうと考えたという。何度か通ううちに、年齢も同じということもあって話も合いつつ遊び友達になった。杉の板でできた和製ダゲレオタイプに大判のポラロイドフィルムをセットして撮り合ったり、李朝の壺とかの真贋を確かめようなどとタワシでゴシゴシ洗ったり、僕が彼のカメラを修理し、彼が僕の時計を修理するなど遊びはつきなかつた。

Mさんはハムを作るのも好きだった。お店にお邪魔すると奥さんに自宅から届けさせたり、僕の自宅に贈ってくれもした。その「Mハム」がいただけると、ちょっとスモークしたり、そのまま調味料代わりにしたりして楽しませてもらっていた。ある時「オレはハムが好きでさあ、あんなものばかり食っていたから大腸炎なんかになったんだね」などと笑いながらいうこともあった。

。 お店でのおつきあひも五年ほど経ったころMさんはピンチに陥った。間質性肺炎の悪化だ。潰瘍性大腸炎というのは緩解期と増悪期（ぞうあくき）を繰り返す病気だが、進行はゆっくりで、出血は不快ながらもまあ普通の暮らしはできる病と聞く。もちろん快癒する人もいる。厄介なのは間質性肺炎で、肺の組織が繊維化（硬化）してしまうため次第に呼吸不全を招く。心臓など他の臓器の負担も大きくなり、進行を遅らせることしかできない厳しい難病といえる。症状が重い時、治療はステロイドの大量投与（パルス）しか打つ手がないようだ。

Mさんもひどい発作にみまわれ、その都度生死の境をさまようという具合で入退院を繰り返すことになった。やがてお店にも出られず、彼に会いたい時は病院かご自宅を訪ねることに。初めて病院に見舞った時、彼は明るく広い個室のベッドに座っていた。げっそり痩せ、肌は透き通るように白い。

「若いころ船木一夫に似てるっていわれてたんだよ」なんて笑っていたことがあったが、痩せたためか確かに似ている。しかしやつれたなあ、というのが口には出せない不安な実感だった。

ふだんはメールのやりとりで彼の体調を聞いていたが、半年ほど前の二〇一五年三月十一日は電話で話した。Mさんが出て来た。声は明るいが話は深刻だった。

「去年の三月ね、医者から余命三か月って宣告されたのよ。いやホント。それでね、すっかり身辺整理して、形見分けも済ましてね」と、こちらが耳を疑うようなことをいつもの調子で語る。彼は続ける。「それでね。ある時、ああ黒ゴマかあって思いついたのよ。それと蜂蜜ね。どっちもピュアなやつ。高いよ。蜂蜜はアカシアがいいんだけど、養蜂家から分けてもらってね。百グラム千円くらいかなあ。でね、それ始めたらだんだん調子よくなったのよ」と、まるで世間話のように語る。

「宿谷さんもさあ、蜂蜜なめるといいよ。お腹にいいからね」などと僕の心配をしている。
「形見分けですか、大変だったんですね。でも声はしっかりしてますけど、今はいかがなんでしょうか...」と聞くと

「いや大変だったよ。電話なんかもね、ゼイゼイハアハアでまともにしゃべることもできなくてね。でもこうして結構しっかりしてるでしょ」と改めて黒ゴマ、蜂蜜の効用を説く。

僕は「よかったですねえ。いやよかったですよかったです」と電話を切った。

半年ほど経ったので、またMさんのご機嫌うかがいしなくちゃとメールを送った。

「Mさん、その後お変わりありませんか。僕も最近蜂蜜なめています。若い友人にバイクをもらったので遊びに行きたいと思っています」

何分かすると奥さんから返信があった。

「おはようございます。どう申し上げたらいいんでしょう。Mは三月二十一日に亡くなりました」「様態が急変し、息子と呼べというので息子と呼び二人でみとりました」「Mは覚悟していたんですね。苦しそうにしていたましたが、自宅で最期を迎えたかったんだと思います。火葬のみで葬式無用と遺言していましたので、誰にもお知らせせず家族だけで送りました」「友達に知らせなくていいのと聞くと、みんなオレの生き様は知っているからいい」と。

Mさんは様態が急変して一週間後に亡くなった。それは僕が電話で会話した十日後のことだ。急変したのはなんと三日後ではないか。

メールを読みながら足元が崩れる思い。「そんな」そして「しまった」と、しばし茫然自失。僕は春先の電話でMさんがとてもいい状態なんだと思いこんでしまっていたのだ。

奥さんのメールは続く。「長い間親しくしていただいてMは感謝していました。またよく宿谷さんの体調のことを気づかっていました。長い間ありがとうございました」。

Mさん、これは僕の負けです。肩すかし食ったようで信じられませんが、Mさん鮮やかです。Mさんはユーモラスで爽やかな印象を残して消え去ってしまった。Mさん、僕はMさんの不在に慣れるのにしばらく時間がかかると思います。きっとこれからも時々、つい遊びに行かなくなっちゃなんて思ってしまうでしょう。

すでに病院側ですることがなく在宅緩和ケアとなり、常に酸素を離せない状態になっても楽しそうにふるまってくれていたMさん。かなり苦しいはずなのに、自分の病を話ネタにし、むしろ僕のことを気遣ってくれたMさん。亡くなる半年ほど前には「ついに望遠鏡ができてさ。やったよ。写真送るから」と、お気に入りのアンティークの望遠鏡の台の完成を喜んでいたMさん。Mさんの望遠鏡の台は製作途中自宅で見せていただいていたものだ。機械が専門の彼は図面も引いて、極めて完成度の高い工作をする。オルゴールのコレクションもよかった。壊れたオルゴールをいくつも手に入れ、ひとつひとつ丁寧に修理していた。

遊び心、夢いっぱいだったMさんとのおつきあいはなんとも心なごみ楽しかった。僕はどれほど救われたか。Mさん、こちらこそありがとうございました。

(完)

風狂の会 川柳忘年会報告(平成二十七年十二月六日 吉祥寺永谷スペース40)

こんにちは。原詩夏至です。「風狂の会」恒例の年末川柳句会。初参加なので少々緊張しましたが、始まってみれば、大変和気藹々。楽しいひと時でした。手順は、

(1) まず会場で事前に配られる無記名の詠草(詠題「進化」38句、自由詠36句)から、各自がそれぞれ、これも無記名で3句ずつを投票。

(2) 詠題、自由詠ごとに全得票数を集計、上位から順に第一席、第二席、第三席、佳作各1句を選出。

(3) 但し、得票数が同じ場合は、参加者全員で決選投票を行い、順位を定める。結果は、次の通りでした。

【詠題「進化」】

第一席 鰯でも進化をすれば神になる 善寿

「鰯の頭も信心から」と言いますが、なるほど、これを「進化論」風に言い換えれば、こういうお話になるわけですね——「働け！ 戦え！ 自然淘汰だ！ 適者生存だ！ そうすれば、お前のような鰯もいつかは神様になれるぞよ！」。とはいえ、これはなかなか修行のキビシイ、しんどい「新興宗教」ではありますね。むしろ、テキトーに鰯の頭でも拝んでいた昔の方が、却って楽園であったのかも。

第二席 おむつとれ進化ですねと笑う嫁 志郎

「おむつの取れた孫の成長を暖かく見守る両親と祖父母」という、ヒューマンタッチの「ファミリー川柳」？ いや、それとも、おむつがとれて「進化ですね」と笑われているのは、ひょっとして書き手自身？——とすれば、これはまたなかなか苦み走った「シルバー川柳」ですね。或いは、いっそ、真ん中を取って「おむつの取れた孫の成長をお嫁さんと一緒に喜んでいるうちに、ふと、その孫の姿と近い将来の自分の姿がダブった」というのはどうでしょう？ 実際、子供は、所謂「隔世遺伝」で、両親よりも却って祖父母に面影が似通うことも多いそうですから……。

第三席 俺たちも進化の結果か認知症 精一郎

これはもう、押しも押されもせぬ堂々の王道「シルバー川柳」。しかし、我々人類それ自体も、進化しているつもりで実はどんどん退化しているだけかも知れませんね。「文明が進み、今は昔よりずっと幸福」と思い込んでいることが、そもそも、一種の壮大な「認知症」に過ぎなかったりして……。

佳作 進化して人類みんなメガネかけ 筑三

そのいい証拠が、例えばこの句です。「メガネ」は視力のアウトソーシング。その「メガネ」が、もし製造元の都合による何らかの偏向の入った「色メガネ」だったら……怖いですね。或いは「健康」のアウトソーシングとしての「サプリメント」が一步進んで「我が社のサプリは体だけでなく心の健康までお手伝いします」と「人を幸せな気分させる成分」まで調査し始めたら……それはもう、立派な「ドラッグ」ではないですか。

【自由詠】

第一席 湯たんぽに孫の名つけて妻が抱く 志郎

最近の若い人は、例えば自転車やパソコンなんかにも「チエコ」「ポチ」「ジルベール」等々、ペットと同じように名前をつけて可愛がっているようです。これが「動物愛護」と同じように、「モノを粗末にしない、乱暴に扱わない」「愛用した機械を、古くなったからと言って人間の都合で勝手に捨てるな」等々の運動に繋がって行ってくればいいのですが.....。この句の「湯たんぽ」も、今はまだお孫さんの代理ですが、そのうちそれとは別の情が移って、心の中で独自の存在を主張し始めるかも知れませんね——或る意味、ちょっと怖いような気もしますが.....。

第二席 山男 ストック持ってケーブルカー 筑三

今や登山界における「ストック」は「自力で山をよじ登るための実用ツール」から単なる「ファッション」もしくは「『俺は山男だ!』という自己主張ないし自己規定のための象徴」みたいなものに変質してしまったのでしょうか。しかし、考えてみれば、そういう「昔は実用的だったかも知れないが、今や何のためにあるのかさっぱり分からないもの」って、結構ありますよね。例えばネクタイとか.....。

第三席 露と土 ロシアトルコで泥まみれ ますみ

なるほど、「露（ろ）」と「土（ど）」が混じり合って「泥（どろ）」ですか。かくして、戦いは「泥沼化」。「うまいっ、座布団一枚!」.....って、いやいや、そんなこと言ってる場合ではありませんね。大変です、そんなことにでもなろうものなら。喧嘩の前に、まず、人間には、そもそも「口」というものがある。両者の間で、誰かが「口」を利いて、それぞれが自分の思いを率直に「吐露」しあうようにすれば、そこから平和の展望が開ける、ということも、或いはあるのかも知れません。

佳作 大の字に寝てたら妻に跨がれた 詩夏至

「あー、いいなあ、やっぱり家は。何て自由なんだろう、これぞ一小天地.....」「ていうか、ちょっと、そこ、邪魔なんだけど」.....って、いやいや、そんな会話を交わす暇すらありませんでした。後はただ、新感覚派を代表する横光利一のかの名フレーズ——「沿線の小駅は石のように黙殺された」——が脳内にかなしく鳴り響くばかりです。

それでは、最後に入選・佳作以外に筆者が選考した、名前入りの詠草を十句ずつご紹介します。皆様、どうぞよいお年をお迎え下さい。来年も、どうぞよろしくお願い致します。

☆ ☆ ☆

詠題「進化」

- | | |
|-----------------------|-----|
| 1. 何だこりや進化進化と退化する | 耀 |
| 2. 象の牙進化しすぎて邪魔となる | 清志 |
| 3. 鶏卵はだちょうの卵に進化せず | ますみ |
| 4. ネットネット ネットの進化でオレ退化 | 武彦 |
| 5. 進化して自由が消えた原子力 | 昌憲 |
| 6. ロボットの進化のあとの河童の屁 | たか子 |

- | | | |
|-----|------------------|-----|
| 7. | 深海の進化忘れた原始魚 | 雅樹 |
| 8. | 進化論なんか知るかとかたつむり | 詩夏至 |
| 9. | 進化してもやっぱりサル目ヒト科属 | ふみを |
| 10. | 変革だ！保守の党首の進化論 | 昌憲 |

自由詠

- | | | |
|-----|-------------------|-----|
| 1. | 五郎丸 名前もいいけど顔もいい | 武彦 |
| 2. | 閻魔疍杭はまだかと催促し | ふみを |
| 3. | 口答えせぬが亭主の処世術 | 清志 |
| 4. | わたくしは不活躍社会を実践す | 耀 |
| 5. | 憲法の顔を潰した安保法 | 昌憲 |
| 6. | 戦争法喉もと過ぎれば何とやら | 善寿 |
| 7. | クラス会渾名を先に思い出す | 昌憲 |
| 8. | 反論は空しいだけの頑固者 | 雅樹 |
| 9. | こぼすなよ オトナになれと孫が言い | 筑三 |
| 10. | 春画展 行ってこようかいくまいか | たか子 |

(完)

思想と年齢

後に戻ることにします。何故なら別々になった観念の進行状態を各々に、最近の数年前まで追わなければならないからです。それ故に私は想像力の形式を探求するように導かれましたが、それはデカルトが語るように、魂と肉体による結合を強固にすることでしかありません。芸術は、その作品における形式を、人間が如何に記しているのかを私に示しているのです、その道を私に照らしています。そして人間が思考するのは、まさに作品から出発します。その人間は極めて豊富な一種の図式主義を私に示しましたので、諸観念の自然史のように与えてくれました。そしてプラトンの天使のような諸観念は、何千回以上もその様な人間が地獄へ落ちるのか、救済されるのかを見抜くのに役立ちましたが、全ての人間が有名な神話も下降する図式を形づくったように、絶えずそうなるのです。それにも拘わらず私は歴史を完全に忘れることが出来ませんでした。それは正しく理解するなら、私たちの思想における地理学の一部になるのです。史的唯物論の有名な観念は、私には何時もその一般的表現において、同じ様な意味の語句を反復して強調する方法を行っているように見えました。その適用に関しては、歴史と同じ精神です。それは移住、野営と要塞、取引と探検、職業とその変化に従って、あれやこれやの文明、人間の階級、偏見、情熱、思想、理想と神々が現れるのを見ます。幾何学は、ついには至る所で同一になるにしても、それでも毎年、耕地の境界を見付ける必要があったエジプトのような場所で生まれたのです。天文学は、霧の多い地方では始められませんでした。流体静力学の全てと物理学のかなりの部分は、海から教わりました。同様に建築技術は、固体の均衡法則が我が国の山岳地方に既に自然とあり、麦畑にも建築の要素があります。しかし職業や科学を理解させるだけの、これらの事例に止まっているは余り良くありません。職業には行為があり、言葉に劣らずそれらの行為には観念を見出しますし、習慣を規定する自然な法則があります。私はバルザックの『田舎の医者』に、死者を悼む二つの泣き方に会いました。一つは、もう一つよりも厳格で人には慣れないものですが、それは標高の違いによるものでした。私が最も頻繁に、何処から私の観念を理解したかは、この事例からお分かりのことと思います。但し、プラトンやデカルトやカントやヘーゲルの方が、道路坑夫や郵便配達人や牛飼いを私が認識するためには、モンテーニュやバルザックやスタンダールよりも役立ったことを知って貰いたいと思います。しかしそうは言っても時折、行為が観念に先行しなければならなかったことも良くありました。行為から行為への創意工夫は、沈黙した神々しか生まなかつたことを私は単に言うだけです。従って、例えピュロン(1)が疑わなかつたとしても、誰もそれを知らなかつただろうと思います。私は哲学を表象と見做して貰いたくありません。そして、偉大な巨匠たちを決して曲解しない姿勢を私に決心させたものは、表象に止まりたいと思った者たちに表象を失わせていたのです。マルクス主義者たちが事例の後を追いかけて、それらの事例を見もしないでそれらに執着しているのを見るのは、喜劇的です。想像力が理解力になると思うことは、直ぐに行き詰まります。この様に理解すると、宗教史は歴史も宗教も殺します。しかしその反対に、慣習の中で常に観念を探究していると、私は人間を再発見し

たり、宗教を通じて精神そのものまで見抜くのに希望を持ちました。いずれにしても慣習の観察は、もっと適切に言うなら、慣習的行為の観察は心地よいものでしたし、教育の目覚めであり、救済された正しい意見のようなものでした。しかしながら私は、人が私の話に大笑いしていたことに気付くのを認めましたし、常に思索の冬から救済される術を知りました。人は楽しみながら教えません。この深く隠された原則は、想像力が理解力に代わることが出来ないと先程私が述べたことの必然の結果でしかありません。これらのことを用心して、私は如何なる新しい風俗、如何なる神学、如何なる政治が、結果として機械織りの発明となって行ったのかを探究するのが好きでした。これを逆に述べるなら、私は亜麻を持ちました。つまり亜麻は機械で織れないのです。一方には工場がありますが、もう一方には家内作業場があります。一方は徒刑囚による様な修行がありますが、もう一方には父や母や兄による修行があります。主の祈りが何処で再び生まれ、そして何処で多分死ぬことになったのか、私は良く理解しました。そして全ての川が亜麻を漬けるのに適している訳ではないのに、私は宗教を流れる川、敬虔で奇跡的な川を持っていました。工場を分散させている鉄道は、都会の精神と田舎の精神を混合させました。犬の調教師と馬の調教師は、二種類の人間を作ります。坑夫は恐ろしい仕事によって規律正しくなります。そして軍務に関しては、卑小さを超えた教義と、孤立した塔のように驚くべき道徳を育むことを人は良く知っています。しかしながら、水兵の信念は陸軍の兵士と同じでないのは明白です。更に、海岸に住む人は、迷信にしろ宗教にしろ政治にしろ、内陸に住む人と対立します。私はそのような諸観念に緩やかな傾斜をつけようとして何時も書いて来ましたが、今でも書いている『プロポ』に導かれて来ましたが。しかし大戦後は千人程の読者のためにしか書きませんでしたので、その変化から私は困難なことにも恐れなくなりました。千人程の忠実な読者は、何時も私について来てくれることを確信していました。それ故に教育は『プロポ』に移り、『プロポ』は教育に移りました。何故なら想像力は観念に道を開き、観念は想像力に生氣と方向性を与えるようなもので、それは同じことであるからです。この光がなければ想像力は、驢馬が自分の耳の影に躓くように、想像力そのものに躓き易いのです。

幸福なアラビアと言われるように、解放されてあちらこちらを散歩するようなこの教育を、幸福な哲学と命名しなければなりません。実際には私は決して遊びに耽ったりしませんでした、少なくとも後悔することなくそれを味わいましたし、弁解して人を笑わせる必要は少しもありませんでした。困難な観念にとってはこれ以上に良い準備は決してありません。〈バルバラとケラレント〉の形式論理学の授業でさえも楽しかったことを私は思い出します。行為には継続した図式主義を運用することである、と私は思います。人間の身体を解放するのは並々ならぬことであるからです。

読者が有頂天になることなく上機嫌で、小品で構成された作品である『思想と年齢』によって解放されたことを私は願っています。短命でしたが美しい雑誌「銀の船」には、『思想と年齢』に所収されても良かった小品が幾つも見付かることと思います。それらが何故一つも所収されなかったのか、私は言う術を知りません。それは『マルス』の新しい方法だったのですが、興奮は何らありません。私は人間と和解したのです。長所の中のように短所の中でも、その詩人を愛しました。如何にして幸福と不幸が詩の中で変わるのか、そして神話と芸術と宗教が毎日身につける衣服を作っているのかを私は理解し始めていました。この明るい気分がこの本の色調になっ

ていて、少なくとも外見上は平易過ぎるということ以外に私は非難しません。それには私にとって〈帰還〉の味わいがあります。私は無頓着をそこに見出します。赤い雑誌から私がこれ程入念にさせられたことはありませんでしたし、その上私は愛しました。私を理解してくれた労組員としか私は知り合いになりませんでした。勿論、彼も同様に本心を求めていました。

同じ頃に私は数日間で短い作品を書きましたが、それは大変に早く発表されました。それは殆ど評価されていません。何故なら五十部しか印刷されなかったからです。それは〈友情〉の証しでした。偶然から私は見知らぬ読者の一人、多分最も迅速で最も鋭い人々のうちの一人と会いました。私は彼のために『心と精神の問題についてのアンリ・モンドール博士への手紙』を書きました。この書物は私が特別に愛した一つの事例で、今でも豪華本を数冊持っています。それは、全ての困難が集められている問題に取り組む直接的な方法の本でもあります。私の生徒たちが良く知っている方法です。感情の情動と情操に関する自説が常にありましてし、今日でも私のディオゲネス⁽²⁾の樽になっています。私はそれを私の前で揺らすだけで、殆ど前進していません。

(完)

(1) ピュロン(前三六五頃～前二七五頃)は、古代ギリシアの哲学者で、懐疑論の祖とされる。

(2) デイオゲネス(前四一三～前三二七)は古代ギリシアの哲学者で、犬儒(キニク)学派の代表者。辛辣な精神を持った彼は名誉も富も社会的礼儀も軽蔑し、素足で一枚のマントを覆って、樽の中で生活したと言われている。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけてたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。

日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

宿谷 志郎（しゅくや しろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビクトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二

年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。現在、収集したカメラに着せる「カメラベスト（一枚の革）」を制作中。旅と地酒と人との出会いに憧れており、エッセイを年四回「風狂」に掲載したい。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツァルトの作品。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのパー）に、随想集『アランと共に（Ⅰ・Ⅱ）』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ（Ⅰ～Ⅴ）』『文明国の戦争で真の原因になるもの（上・下）』『神々（上・下）』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと（上・中・下）』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

中平 耀（なかひら よう）

一九三〇年生まれ、群馬県出身。詩集『吊るされた鳥』（思潮社・一九六一年）、『時の中の橋』（詩学社・一九七三年）、『樹・異界』（神無書房・一九八一年）、『花についての十五篇』（花神社・一九八六年）、『滑稽譚』（花神社・一九九二年）、『木』（花神社・一九九七年）。訳詩『マンデリシュタームの詩』（集英社『世界の文学15・ロシアⅢ』・一九九〇年）、詩評論『マンデリシュターム読本』（群像社・二〇〇二年）。二〇〇二年、『マンデリシュターム読本』により第四回小野十三郎賞特別賞。これからしたいことは、集大成した詩集を出すこと。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫻自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつゞら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺 二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。二〇一六年は京都での作品発表を予定している。

（以上）

読者からのコメント

アラン『わが思索のあと』思想と年齢：『マルス』を調べて分かったことは、戦争体験者として書かれていることなので、真実なのだと思います。反戦に共感しました。喜びは病気を良くするということ。早速実行したいです。落語を聞いた後痛みが良くなったということでしょうか。楽天的に心がけようと思います。『風狂』（2016年6月版）を読ませていただきましてありがとうございます。

永井荷風を考える：私は読んだことがないので、教えていただきました。

世の中（二）：小説を読まない私なので、何も分からないのですが、賞の選考の経過を面白く読ませていただきました。

三浦逸雄の世界（七の二）：窓の外は枯れ木が耐えています。人も苦しさに悶えているのでしょうか？

三浦逸雄の世界（七の一）：人と犬の関係がいいですね。人と人もこうありたいと思います。

ウインドウズ10：アイクrosoftは、速くウインドウズ10のしたいのようですが・・・パソコン教室の友は振り回されています。先生はそのままにと言っています。私は丁度10に買い換えたところですが、操作方法を教えてもらっています。最終連が、気分がいいですね。ほやほやの現代を詩にってしまうなんてすごいですね～。

友達：さわやかな5月の躍動感が伝わってきました。友達っていいですね。

高浜：心象風景が書けないでいます。このように書くのだと勉強させていただきました。最終連いいですね～。

老の話：老いるとはこういうことのように見えますが、長尾さまは違いますよね。そうありたいと思いますが、なかなか詩らしいものも書けないでいます。

キーちゃん：昔、インコが増えすぎて、鳥小屋に小窓をつけて、きっと帰ってくるよねと待っていたことがありました。やっぱり自由がいいのね。そう思った時のことを思い起こしています。最終連がいいですね～。

男の触覚：作業現場の緊張感が迫ってきて、清々しく感じられました。

野の花：中平さま、山みちを散歩されていらっしゃる。お元気で何より嬉しいです。私は歩く

のが不自由なので、歩けることって素晴らしいと思っています。私の住まいは丁度同じように、田んぼや畑の中に突然「田島団地」ができて 発展してきましたが、自然の風情がなくなり、ご近所の絆も薄くなりました。

アラン『わが思索のあと』（二十二）聴講者たち：アランから授業を受けた聴講者たちはしあわせですね。「若い時代を利用しなさい」と孫にも話したいと思います。自己認識に行きつくためには、表現のための長い労苦が必要なのだということは、詩作にもいえるのだと分かりました。また、コントのことを初めて知りました。人間形成には、愛や好意が大切なですね。今月も『風狂（2016年5月版）』を拝読させていただきましてありがとうございます。

アラン『わが思索のあと』（二十一）詩人たち：ここに引用されている詩を読んでいませんし、詩の言葉と散文の言葉も分からないくらいで、お恥ずかしいです。この中で、詩は、リズム・形式・想像力・発見・美しい言葉・人間の姿を描くのだと教えていただきました。とても難しいです。宇宙は忠実で純粋・運命に身を投じることが生きることである。観念は詩よりももっと重要な役割を持っているなど、感じ入りました。ありがとうございます。

あまくない広津和郎：出版界の裏話・実状を知りました。広津和郎さんは、行動力と強い信念と正義感の人なのですね。私は何も知らなくて恥じ入ります。神宮さまも、同じようなお人なのだと思います。私の知人は、まじめで正直者な人でうつ病になりました。悪い人は、そういう病気にはならないと確信しています。

世の中（一）：小説の受賞の裏話に驚きました。世の中のことを教えていただきました。詩集の受賞も、同じなのでしょうか？難しいことは分かりませんが、好むものとそうでないものがあるって、好きなものにこころ惹かれます。

三浦逸雄の世界（六の二）：「山の向こう」天使が山の向こうにしあわせを運ぶのかしら？

三浦逸雄の世界（六の一）：「迷いで山羊」迷える羊を、お月様が優しく照らして導いているのでしょうか？

石の話：不思議な世界に引き込まれました。

おぼろな時：斎をとるという言葉を知りませんでした。誰かが亡くなる時、何かわからないけれど、身内に知らせがあることをよく聞きます。不思議な状態をよく分かるように表現されていて驚きました。不思議なことってよくあるんですね～。

データ不正：車の燃費のデータ不正のニュースがありました。会社に裏切られた購入者の怒りがよく分かりました。いつも社会性のあるお作品に感じ入ります。

ナマコ： ナマコの生態がよくわかりました。 カイコガを書きたいと思っているのですが、図鑑に書いてあるのを 写したのでは詩にならないと言われました。 勉強させていただきます。

庭： どうでしたのでしょうか？ お父さんがみえないけれど・・・

アラン『わが思索のあと』（二十一）詩人たち： 詩人たちには興味がありました。 詩は、思考と感情・形式・リズム・韻・観念が大切なのでしょうか。 宇宙は忠実で純粹。 人は終わりから始まる。 人間の姿を描く。 運命に身を投じることが生きることである。 などが心に残りました。 まだ、詩になっていないものを書いていますので、 勉強させていただきました。

美しき土地、美しき人（五）： 親しくおつきあいをしていたMさん。ステロイド投与していたMさん。（私も）かなり苦しいはずなのに、僕のことを気遣ってくれたMさん・・・ 私にも同じ経験がありました。涙が溢れました。美しき人ですね。宿谷さまも美しき人ですね。

大岡昇平『俘虜記』再読俘： 私は全く小説を読んでいないので、お恥ずかしい限りです。戦争体験者が、口を揃えて反戦を訴え亡くなっていくのに、 どうしてでしょう？おかしな方向に向かっているのは・・・ 今だから『俘虜記』を読むべきだと思いました。真面目な人が精神を病んでいます。「病とともに生きている人」（私も）がたくさんいますね。

「無題」： 花瓶いっぱいの美しい花。どんな色でしょうね？

「散歩」： まっすぐにのびる道ばたの樹木が、暗く爆発しそうに見えます。

波がきた： 私も、寄せ来るさまざまな波に、もまれ、飲まれそうになり、ゆうらりゆられ、育てられ、ここまできました。

見える： 赤軍派の事件を思いました。本当に見えるのでしょうか。霊に怯えている、こころを病んだ人をよく知っています。

市場の人： マンションに住み、誰にも看取られずに逝った画家の友人がいて、心残りがあつたであろう友人の思いを、背に負っていた作者。その人の遺作展を観に行った帰りに、友人がが楽しみにしていた、近くの市場の食堂に行たのだが、活気ある市場の人のお愛想のいいのに、戸惑っているようです。物語が見えるようです。

志乃： 私は小説『忍ぶ川』も読んでいませんが、志乃の純愛が見事に詩になっていると思いました。

春の孤独： 早春の野辺の孤独。やがて訪れる恋の予感に希望を託したいです。

昭和の哀歌：昭和初期の農村の、夢にも思い描かなかった過酷な現実が良く分かりました。僅かな労賃・機械が入って減った労賃・人並に1枚の毛布も買えない娘さん・借金のかたに娘を売らなければならなかったこと・涙が流れてきました。戦争で、平和でも、儲ける不届き千万な人種のいる地球に住んでいることを知りました。

「無題」：顔の造作がないのに、なぜか、女性の存在感が感じられます。

「灯台」：三浦様の絵は、絵ごろのない私でもすぐに分かります。暗い海に、すつくと立つ灯台の存在感が伝わってきました。

アラン『わが思索のあと』（二十）帰還：戦地から帰還して、気象観測隊になり、その後、教壇に立ったアラン。その中で有名な『芸術論集』（不勉強な私は知りません）を仕上げたことを知りました。詩は、一種の信仰と祈りだ。正しい思想を、音響、韻を踏んだ美しい言葉によって紡がれる。人間の最も美しい無謀さは、幼少期の夢の続きである。宝物だ。詩には、愛と勇気・良心・誠実・清廉潔白・不屈・平和を願うことなどが謳われていると思いました。

視線のもつエネルギー：視線に、そのようなことを感じたことがなかったので、発見でした。能面から、妖艶な魔性の女の視線などなど、男性の受け止め方を知りました。

月見櫓：世が荒れたように思います。私も、風流や人情を懐かしく思うこの頃です。

マイナス金利：「そんな馬鹿な？」ことが起こっている現実を書かれていて共感しました。

ハンデミック：ヘイトスピーチをする人たちを見ているだけで、何もできないでいる私です。詩に代弁されていて良いことと思いました。

あこがれ：今はトンネルの中でもあきらめず、あこがれを抱き続ける。希望を持ち続ける姿に、私を重ねて共感を持ちました。

アラン『わが思索のあと』（十九）芸術：私にとって、芸術とは雲の上のことで、難しく拝読しました。アランが『芸術論集』を出版し成功をおさめたこと。自分が信じているものへの、自由な活動や人間としての活動をしていたこと、解放された独立性そのものによって、集団を作っていたこと。ヴァレリーは思想の大家であることなどこころに残りました。毎月、このような大作を出されて、凄いと思います。ありがとうございます。

クレモナ・ヴァイオリンの謎：永遠の生命の神秘が宿るヴァイオリンの音色って、どんなでしょう。それを作った人は凄い人ですね。知らない世界をありがとうございます。

日夏耿之介のエッセイから：無学で学匠詩人という偉い人のことを知りませんでした。とても難

しく拝読しました。今、詩の朗読がなされているようですが、朗誦は詩の致命的題目ではないということは理解できました。私の作品は、詩らしきものにも入らないのだということが解りました。

無人家屋：今は廃屋の家屋にも、確かに人の生活があったはずです。どんな暮らしだったか、それを語る人はいないけれど、詩人はこのように表現するのだと思いました。

日本語教師：日本語は難しいそうですね。中国語専門の、日本語教師さんは大変なことを知りました。

老いた年金生活者の嘆き：悲しみの人に、わずかばかりでも善意行為をした人は、偉いと思います。現実苦があるので、見て見ぬふりをする人が多いと思いますが・・・私は、「W・Bイェーツ」のことを知りませんでした。感じ入りました。

土壁：便利で楽になったことはありがたく思います。けれど、思いやりや人のこころの温かさなど、崩れ去ったもの大きさを感じる昨今です。

称名：人のいのちを何と思っているのでしょうか。殺すことを何と思っているのでしょうか。

アラン『わが思索のあと』（十八）軍隊：戦争体験のテレビを良く見ました。軍隊の兵士が互いに平等を感じているとは思ってもよきません。死ぬのは美しいという偏見に、若者たちは戦場に送りだされ人生をなげうった若者たち。いわれのない軍隊的暴力は日常だったと語っていました。防衛のみならいいが、戦争が出来る国になりつつある現在を怖いと思います。何もできないでいます。

ある画伯の一面：私は絵を見る目がまったくありません。裏話に驚いています。

ある夏：海に近い村に、懐かしい日本の原風景に出会いました。海辺に咲くというハマボウフウのことを初めて知りました。乱獲で消えたのでしょうか？海から遡上してくるアユの姿が見えなくなったのも、人によって自然破壊されたからでしょうか？私の村も、開発され便利になりましたが、昔の面影はなく、蛙や虫の合唱、野道に咲く季節の花などの、のどかな風情や思い遣る人情を懐かしく思い出しています。

あるボランティアの日：3・11の後、ボランティアに行かれたんですね。何もできない私は、尊敬します。臨場感があふれていて、皆さんのことを知ることができました。忘れてはならないことを教えてくださって、ありがとうございました。

グロリア：愛の物語かと、面白いと思いました。終連の、峠三吉の詩と俺の叫びが同じとは？本音とはいえ・・・私は真面目すぎるのでしょうか？

田園都市線：横断することなく我が道を行く、田園都市線と新幹線。（何かおかしい！）都心は自分を失ったり、都会の憂鬱をかいだりしている。みんなと同じじゃなくたって、無駄のような人生だっていいんじゃないかと私も思いました。

上州路：赤城山のふもとを流れる渡良瀬川。陽水の歌を聞いている蝶。晴天にあそびいわし雲。（いわし雲大好きです）小春日和にゆれている熟柿。光景が見えるようです。

無人家屋：よく見かける無人家屋に、かつてここに生きていた人へ思いをはせる。人知れずそこにいなくなった人を、思い遣る深い心が伝わってきました。

今年もよろしく願いいたします。表紙いいですね～。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)

2016年版上半期 (18号～23号・合併号)

<http://p.booklog.jp/book/104239>

編集：風狂の会 (担当：高村昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104239>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104239>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ